

CONTENTS

自作自演218 ..... 関戸敏訓・高井宏之・鈴木道夫 ..... 2

東海とっておきガイド 99 岐阜編 ..... 山田浩史 ..... 3

第3回 木造建築の語られ方  
 明るい農村住宅の嫁と姑 ..... 竹内孝治 ..... 4

第34回 JIA 東海支部設計競技「21世紀の戦後住宅」2次審査結果 ..... 6

金賞 | 前田真里・藤城太一  
 銀賞 | 山下陽輝・森亮太・梶浦悠翠  
 銅賞 | 筒井 伸・斉藤知真・伊藤一生・小澤巧太郎・西川公貴  
 銅賞・ゲスト審査員賞 | 平野晃平  
 奨励賞 | 中島生幸・内藤卓郎・春田隆道・平井優輝・中田智徳・池田 匠  
 < 講評 > 西沢大良・大西麻貴・栗本真壱・塩田有紀・水谷夏樹・南川祐輝  
 < 審査経過 > 寺下 浩 < 記念講演会 > 間瀬高歩  
 金賞受賞者の声 ..... 前田真里・藤城太一 ..... 13

静岡発 建築文化研究会「谷尻誠氏」講演会『意識のデザイン』 ..... 石川正子 ..... 14

東海発 小堀哲夫氏 JIA 日本建築大賞2016受賞記念 見学会・講演会  
 『ROKI Global Innovation Center -ROGIC-』 ..... 西村和哉 ..... 15

愛知発 法人協力会・事業委員会共催研修見学会 高木耕一・篠原慶直・吉川法人・寺井真理 ..... 16

愛知発 JIA 愛知発 建築見学ツアー 2017  
 伝統工法で家を立てる 飛騨の大工と話す ..... 佐藤和正・久田佳明 ..... 18

JIA 三重発 建築ウォッチング2017  
 古き良き歴史を尋ねて - 奈良・明日香村 - ..... 相原宏康 ..... 19

2018年度 役員選挙報告 東海支部・愛知地域会 ..... 20

東海支部役員会報告 ..... 澤村喜久夫 ..... 21

保存情報 第195回 安長寺山門 ..... 谷村 茂 ..... 22  
 名古屋市守山区翠松園・「翠松園の邸宅」 ..... 原真佐実 ..... 22

会報誌『ARCHITECT』の行方 ..... 森口雅文 ..... 23

地域会だより ..... 23

編集後記 石田博英・黒川喜彦彦 ..... 24

Inspire the Next 10

立春も近づいてきましたが、まだまだ寒い日が続く今日この頃。冬と言えば美味しい魚、魚と言えば漁港……やはり漁港は冬に限る! ということで、今月の表紙は冬の漁港です。

漁港では被写体が見つけやすい。ディテールが多いからでしょう(本来ならばこういう解像度を求められる被写体は、レンズを絞ってさらに解像度を上げたいところですが、ボケが綺麗に出るレンズなので今回はあえて開放で撮ってみました)。

漁船が幾重にも重なり、大きなスケール(建築的なスケール)でありながらも、繊細なディテールが密に混じり合う。建築ではなかなか実現し得ない「スケールに対する解像度の高さ」に魅力を感じたのだと思います。

iPhoneのディスプレイの解像度も人間の目の分解能を越え、ドットが見えなくなって久しいですが、VR時代の今、さらなる解像度が求められています。コンピュータアルゴリズムにより生成される



冬の漁港

解像度  
 Leica M9 + Leica  
 Noctilux 50mm/  
 f1.0 E58  
 (豊浜漁港 / 愛知県知多郡)

ジェネラティブデザインの魅力もまた、その高い解像度にあると思います。もののかたちに対するディテールスケールのあり方を考えることは難しい……。冬の漁港を眺めながら、建築におけるディテール=解像度とは何かと考えさせられました。



降旗 範行  
 FULL  
 POWER  
 STUDIO



関戸 敏訓 (JIA 静岡)

公共設計 (浜松市中区砂山町353-3 TEL053-455-4402 FAX053-455-0154)

## デンマークを旅して

ここ最近、視察を兼ねた海外旅行が増えてきた。北欧、南欧、東欧、米国など年1度のペースで旅行する機会に恵まれた。今回はデンマーク・コペンハーゲンで最も一般的なモデルとされる、高齢者住宅「Ørestad Plejecenter」について書いてみたいと思う。

「Ørestad Plejecenter」はコペンハーゲン屈指の開発エリアにあり、設計コンペから選ばれた JJA 設計事務所が設計を担当し 2012 年 5 月に完成した。1階にはレストラン、美容院、歯医者などのテナントが入り、各室には介護ベッド、バスルーム、キッチンとリビングルームを備えている。介護サービス利用料は全額公費負担となり、本人負担はないが、居室使用料と食事代は全額個人負担となる。

特に特徴的だったことは、ボランティアの活動。人口の半分以上がボランティア活動をしているというデンマークだけあり、ケアワーカーは身体介護や家事援助を専門職とし、人道的なサポート(心のケア)はボランティアが活動している。友達や家族のように一緒に食事やカフェをし、映画・音楽鑑賞、クリスマスなども楽しむ。専門の教育を受けたボランティアは、看取りの手伝いもするそうだ。毎週定期的にさまざまなイベントを行っており、入居者の家族、ボランティア、地域の住民、学生なども一緒に参加できるようになっている。

デンマークでは「高齢者は介護の対象」ではない。高齢者も含めたデンマーク人は福祉サービスの恩恵に依存するのではなく、「自分の生活は自分で」という自立の精神が高く、本人の自立性を最大限に尊重するための制度と精神が両立している。介護と医療、生活支援など相互のバリアをとり除き、容易に複数のサービスを利用し細かな対応を受けることができる。近年、日本でもこの地域包括ケアに似たシームレスな在宅療養サービスが試されようとしている。

自分らしく生きることに積極的になれる制度、自立性を徹底的に尊重する精神性、本来あるべき自分らしく生きる権利があらゆる観点から守られているデンマーク。これが「世界一幸せな国」と言われる所以なのかもしれない。



高井 宏之 (JIA 愛知)

名城大学理工学部建築学科 (名古屋市中区塩釜1-501 TEL 052-838-2546 FAX 052-832-1179)

## 今は昔か「巨人の星」

昨年度、都市住宅学会の学会誌99号の特集を企画・編集した。テーマは「都市・住宅分野で求められる人材と育て方・育ち方」である。

大学教員になって建築学科の就職担当を二度務めた。20年ほど民間企業において新人の様子や企業側のニーズは理解しているつもりであったが、よくよく眺めてみると学生気質は激変。「ブラックではない良いところはありますか?」「福利厚生で選びたいんです!」どうしても、今の学生は……とつい見てしまう。いやいやしかし、学生気質や人づくりの仕組みは時代を映す鏡。人材の育て方・育ち方にも時代に適するマインドや技術があるのではないか。このような問題意識から、上記特集号(\*)を企画し各方面の方にご執筆いただいたが、この中で最も心に残ったのが、元リクルート就職情報誌編集長で著書『親子就活』をお持ちの中村昭典氏の次の言葉である。

『バブル崩壊は、若者たちから仕事の選択肢を奪ってしまったが、それよりも悲しいのは、彼らのキャリア観から、夢を封印してしまったことだ。誰もが知るような大企業が倒産し、身近にもリストラに遭った大人の姿を見てしまったことで、厳しい現実の前に夢を口にする気力をなくしてしまった。』

私が小中学校のころ、「巨人の星」が一世を風靡した。部活では柔道とバレーボールが盛況だった。私の勝手なイメージかもしれないが、巨匠建築家はまさに大きな輝きを放つ「巨人の星」。それを目指し格闘する設計者は、みんな夢をもち根性に満ちていた。

さすがにいまの若者に根性を求めるのは時代錯誤であろうが、少なくとも建築設計は夢を描き続ける産業であり、学生がみんな夢を口にする社会でありたいと思う。

(\*) 上記特集号は都市住宅学会員には既に配本、学会で販売中。発行後1年を経過した2018年12月頃にJ-STAGEに全文公開される。



## 鈴木 道夫 (JIA 愛知)

工房 道 (名古屋市市中川区 柳川町8-5明輝ビル2-B TEL 052-678-7285 FAX 052-678-7286)

### 2020年に向けて

昨今、建築工事費が徐々に高くなってきました。悩みの種です。オリンピックや消費税増税が近くなるとお決まりのようにすべての材料・人工が上がってきます。かといって過ぎ去った後に値下がりにはなりません。ますます、頭の痛いことです。

私は木造住宅を専門に設計しています。独立してからは近くの山の木を常に使用してきました。木材は製材業者から直接、お施主さまが購入しています。「わが家の家の木材はどここの山の木なんだ！自然乾燥の木材は肌艶がきれいだね！」と木材に愛着が湧きます。

ここ3棟ほど訳あって材木屋からのルートで木材を使用しています。もちろん、木の出どころは把握していて、製材業者の土場にも見に行ってきました。

私のなかに何かモヤモヤしたものが出てきました。製材業者？大手代理店？材木屋？大工というルートは世の中ではごく普通の流通経路です。右から左へ木材を流通して商売をしている。メリットがいろいろとあることも理解できます。しかし、お施主さまに製材業者の顔が見えてこないのです。しっくりこない。感動が薄い。

製材業者の顔が見えないということは、製材業者の言葉もないのです。お施主さまと契約するときに製材業者の苦労話、自慢話、熱意などが無いのです……。

私にとってはこの形態はやはりイレギュラーなのか？自問自答しています。

## 東海とおきガイド 99 | 岐阜編 |

## 山田浩史 (JIA 岐阜・ヒロプランニング)



### 岐阜市民会館

今回紹介する「岐阜市民会館」は、坂倉準三氏の設計で1967（昭和42）年に建てられた。水平を強調した白い低層部と、その奥に円筒を斜めにカットしたフォルムが特徴的なタイル貼りの高層部により構成されている。高層部は大ホールになっており1,500名を収容し、館内の螺旋階段は特徴的で美しい。祖父が日本舞踊をやっており、私が子どものころは4年に一度この大ホールで舞踊の会を開いていた。当時、舞踊がよく分からない私は、螺旋階段の手摺を滑り降りたり、1日中館内のいろいろな所を遊び場として時間を潰していた思い出の建築だ。近年、最寄りにぎふメディアコスモス（伊東豊雄氏設計）ができ、影が薄くなった感はあるが、



良き近代建築として今後も頑張っしてほしいものである。

所在地：岐阜市美江寺町2丁目6番地  
TEL：058-262-8111

### 老舗麵処「更科」

市民会館のすぐ裏手に佇む老舗麵処「更科」。1928（昭和3）年創業の蕎麦屋は連日ひっきりなしのお客さんと賑わっている。お昼時には行列待ちはまぬがれないその店で、おおよそ8割のお客さんが「冷やしたぬき蕎麦」を注文する。お昼時ともなると、湯でおき必死のコシの抜けた蕎麦切りは蕎麦比少なめでドス黒いつゆに浸かり、天かすとネギ、油揚げ、どんぶりの縁には練りワサビがたっぷりと添えられる。その1杯をガッツリと底からかき混ぜてすする。序盤に天地返的につゆに浸しておいた天かすと濃い味の油揚げが、中～終盤のヒキを一層強くする。美味しいかと聞かれたらスマートな返答はできないが、また食べたくなる、岐阜人のソウルフードであることに変わりはない。



所在地：岐阜市京町3-4  
TEL：058-265-9594  
営業時間：[月～土] 10:30～19:00 [日・祝] 10:30～18:00  
定休日：第3日曜日

隔月6回連載  
第3回

木造建築の  
語られ方

# 明るい農村住宅の嫁と姑

竹内孝治 | 愛知産業大学造形学部建築学科 講師

田んぼに農薬を蒔こうとする嫁と、それに反対する姑。そんなエピソードが、太平洋戦争勃発の翌1942年に出版された『科学メモ』の序文で取り上げられている。執筆したのは労働科学の父・暉峻義等(1889-1966)。姑の厳しい監視がある昼間を避け、嫁は家族が寝静まった真夜中に農薬を散布。稲の病害を阻止しましたとさ、めでたしめでたしという話。

暉峻は、嫁(科学)vs.姑(迷信)という対立図式でもって、「科学の生活活動への導入と、知性にもとづく生活活動の建設は、先ずこれら固陋な信念、頑強な権力を克服しなくてはならない」と説く。科学啓蒙が遅れた農村の生活革新。それは戦後へと継続した課題であり、建築もまた例外ではなかった。

ということで、木造建築の「語られ方」を棚卸しする本連載の3回目は、戦後民主化に邁進する1950年代日本の農村を舞台に、木造建築の典型でもある伝統農家がどのような〈木造革新〉に直面したのかを見てみたい。前回、敗戦前後の〈木造革新〉を紹介したけれども、戦後復興期に入ると、帰ってきた〈木造亡国〉と合流し、未だ科学の光が届かぬ農村をターゲットに「明るい農村住宅」実現が推し進められていく。

## 木造禁止の模範解答

『建築計画研究の現況』(日本建築学会、1956)に、「設計に役に立たない研究について」という不思議なタイトルの論考が収録されている。執筆者は西山卯三(1911-1994)率いる京都大学西山研究室。そこでは「建築家の手をわずらわさない建築、いや、わずらわそうとしても「建築設計」という形ではつながらない建築もふくめて、すべての建築を通じて国民生活の改善のための理論を追究するのが建築学」であり、今こそ「建築家が設計しない建築のための研究」が必要と説かれている。

そんな問題意識のもと注目されたのが農村。「町や村の大工が主として伝統的なやり方で建てている住宅の大部分」であり、特に非衛生・非合理にまみれた「農具としての農家」だった。農村は封建遺制(さらには日本型ファシズムの土壌)が残存すると見なされ、そこでの生活改善が新日本の民主化へ向けた重要課題と位置づけられたのが1950年代だった。

大正期から推進されてきた農村生活改善は、GHQによる農村民主化の後押しもあって積極化する。戦時には健康優良な兵士の供給を。戦後は農村民主化。知識人たちは共産主義の実現へ向けて。農村はそこに生きる人々の思いとは別に、戦前戦後と連続して「改善」され続けてきたともいえる。

農村の住宅更新＝抜本的な住宅改良を加速するのは、いつの時代も災害が引き金で、1959年9月26日の伊勢湾台風も例外ではない。愛知・三重を中心に未曾有の被害をもたらしたこの台風被害を受け、翌月、日本建築学会は防災地域内での木造禁止を含む「建築防災に関する決議」(1959.10)、通称「木造禁止決議」を議決した。敗戦でもなかなか実現しなかった〈木造亡国〉路線が巻き返しを図ることになった。

伊勢湾台風からの復興へ向け、被災地では鉄筋コンクリート造(以下、RC造)で農家を再建する試みが数多くなされた。たとえば、『アサヒグラフ』(1960.12.25)には「鉄筋農家」という紹介記事が掲載されている。名古屋市南区のある部落では、台風直前にRC造住宅を増築した小島さんの家だけが潰れずに済んだ。建設時は奇異の目でみられた小島邸は、その先見の明を高く評価され、住宅再建のモデルとなる。

また、組織的な住宅復興も進められる。伊勢湾台風復興住宅と呼ばれるRC造の戸建て住宅だ。農村には不似合いな3階建て。1階に農作業場と水回り、風水害時には3階部分が避難所になる。愛知や三重に建設されたこの復興住宅の設計を担当した建築学者・勝田千利(1908-1981)は、〈木造亡国〉を牽引した田辺平学(1898-1954)の弟子にあたる。いわば伊勢湾台風復興住宅は、木造禁止決議の「模範解答」だった。

災害復興を契機に、「農村アパート」と呼ばれるRC造集合住宅も岐阜、三重、新潟などに建設される。設計指導は農村住宅研究の権威・竹内芳太郎(1897-1987)。2～3階は居住空間、1階部分のピロティは共同農具庫や共同作業所、集会所など農村の民主化装置としての機能も担った。災害を機に〈木造愛国〉の語りはかき消されただけでなく、科学啓蒙の遅れた農村にまで〈木造亡国〉をもたらしたのだった。とはいえ、農村住宅RC造化の波が全国へ広がることはなかったが。

## 新しい家相のモダニズム

農村生活改善は、家族本位の間取り、主婦労働の軽減、設備の導入、農作業の分離(後に食糧増産や農作業の合理化へも展開)などを目指した。建築分野では、特に採光や換気に難アリな現状を解決するため、開口部の新設を推奨する窓開け運動が重視された。1960年代制作の「生活改善の歌」(作詞:奥村艶子、補作:西条八十、作曲:古関裕而)でも「窓を大きくひらきましょう。光がいっぱい射すように。そよ風そよそよ来るように。明るい住居はみんなの胸に。元気な希望を持ってくる」と歌われ、明るい住宅は明るい家庭と結びつけられた。記録映画『窓ひらく:一つの生活改善記録』(東京シネマ、1958)では、そんな窓開け運動の熱気を感じることができる。

農村には、西山卯三をはじめ多くの研究者、技術者、生活改善普及員などが入り込んで生活改善が行われた。ただ、なかには改悪もあったことを西山が批判している。台所改善が一種の流行と化し、専門家たちが自己満足的に「改善」を夢想し、農村へ押しつけているというのだ(「農村建築研究会第四回総会に当たってのメッセージ」、『農村建築』1953.9)。そうした「改善」が横行する状況を、西山は「迷信的な「家相」になぞらえてよい一つの「新しい家相」となりつつある」と断じている。

実際、農家住宅は地域で異なる気候に適應していたはずの開口部が、闇雲な窓開け運動により台無しにされた可能性もある(宇野勇治「伝統民家における環境調整手法と現代への応用の可能性」、2003)。閉鎖的な農家にとにかく開口部を設けようという欲求の背後には、戦前から戦後にかけて農村生活改善を駆り立ててきた衛生への強迫観念があっただろう。暗く不衛生な住環境に甘んじる農村を正しく導くには、農村住宅に「明るさ」をもたらす採光がとにかく最優先されたのだった。

さらに言えば、「建築、それは採光された床である」とル・コルビュジエが記したように、採光(とそれを実現する板ガラス)はモダニズム建築の、そして近代の象徴だった。医学や家政学、建築学等の近代諸科学を裏付けに展開された窓開け運動は、農村に生きる人々の生活とは別に、近代化に向けた専門家たちの夢想現実の場ともなる。その夢想の背後には戦前・戦後を通して語られてきた、日本建築とモダニズム建築の親近性も見逃せない。中世貴族の住まいにみられる「開放的な空間」が、モダニズム建築と「見えがかりはまったく同じ」だという語られ方だ(たとえば、篠原一男「住宅論」、『新建築』、1960.4)。モダニズム建築の美学を通して日本の伝統建築を捉え、本来は閉鎖的だった農家をも「開放的」なものと思なす欲望。木造建築は「開放的な空間」を実現する軸組(フレーム)にまで抽象化される。

## そして姑になる

さて、冒頭で紹介した『科学メモ』の序文を書いた暉峻義等は、科学の実践者である嫁の正義を疑わなかっただろう。でも、現代に生きる私たちは、姑の反対は「固陋」な態度と切り捨てられない経験的な知恵とつながっていたことを知っている。農村生活改善の代名詞＝窓開け運動もまた、「明るい農村住宅」を実現する成果をもたらしたと同時に、農家から「閉じる」ことを奪うという副作用をもたらしたこともまた事実だ。

同様に、改良カマドも「嫁殺しカマド」と呼ばれるようになったことを建築家・清家清(1981-2005)が紹介している。なぜ「嫁殺し」なのか。それは「農家の嫁にとっては、むしろ従来の燃えの悪いカマドの前に座っている間が憩いの一刻であって、誰も付いていなくても良く燃えるカマドは、嫁の唯一の憩いの場さえ奪ってしまった」からだ。「本当は嫁の地位の改善のほうが先行すべき重要な事実であるのに、カマドの改良のほうが先行してしまった本末転倒の実例」と清家は言う(『住居 I 住生活論』、1985)。これもまた「新しい家相」の弊害であろう。

結局、農村近代化の試みは、功罪相半ばしながら高度経済成長の荒波に丸ごと飲み込まれてしまい、なし崩し的に近代化は「実現」することになった。その結果たどりついた先が、西山卯三らが目指した共産主義でもなく、モダニストらが夢見た合理主義でもなく、都会と田舎の差異を埋め合わせてくれる資本主義であったことは皮肉な結果といわざるをえない。

この顛末は、農村に生きる当事者ではない専門家が陥る「夢想」のケーススタディともいえなくもない。かつて農村が非衛生で不合理な状態に置かれ、それゆえ「改善」は正義であったことは間違いない。ただ、何をもって「改善」なのか、その見極めはなんと難しい。それこそ、戦前に農薬を散布し稲を病害から守った嫁とて、戦後はカマドの見張りから解放された嫁をいびる姑になったのではないだろうか。人の考えや主張は、歴史や主観、認識図式などにドブプリ浸ってなされるがゆえ、先見の明があった嫁ですら、なんの矛盾もなく固陋な姑になれる。農村や民家、そして木材や木造建築を語るとき、往々にしてわたしたちは知識に拠って「嫁」として振る舞い、同時にロマンを胸に「姑」になる。昨年末になにかと話題になった「世界一のクリスマスツリー」騒動のように、善意と正義が渦巻きながら。



たけうち・こうじ | 専門は日本近代建築史。木造住宅メーカーの実務経験から得た問題意識をもとに、戦時から戦後にかけての住宅計画・生産・供給、わが国における住宅産業の歴史などについて研究している。主な論文に「建築家・内田祥文の「國民住宅」構想に関する研究」、「イラストレーター・真鍋博の未来都市観に関する研究」などがある。

# 「21世紀の戦後住宅」

金賞	「戦後住宅の壁」	前田真里・藤城太一（名城大学）
銀賞	「FREE ADDRESS HOUSE」	山下陽輝（大同大学）
銀賞	「記念碑住宅」	森亮太・梶浦悠翠（名城大学）
銅賞	「浄化町に棲まう」	筒井 伸・斉藤知真・伊藤一生（信州大学）
銅賞	「軍港住居」	小澤巧太郎（東京大学大学院）
銅賞	「小さな家の大きな暮らし」	西川公貴（金沢工業大学大学院）
銅賞・ゲスト審査員特別賞	「多国籍化する居室」	平野晃平（京都大学大学院）
奨励賞	「The terrain of war」	中島生幸（九州大学）
奨励賞	「戦後に咲く花」	内藤卓郎・春田隆道・平井優輝（北九州市立大学）
奨励賞	「2×××年 未来型最少単位住居」	中田智徳・池田 匠（工学院大学）

## 審査委員（順不同・敬称略）

○西沢大良  
（西沢大良建築設計事務所）



◎大西麻貴（o + h）



栗本真彦（栗本設計所）



塩田有紀  
（塩田有紀建築設計事務所）



水谷夏樹（愛知淑徳大学）



南川祐輝（南川祐輝建築事務所）



（○：審査員長 ◎：ゲスト審査員）

## ■審査経過

12月2日（土）、「第34回 JIA 東海支部設計競技」2次公開審査会・記念講演会がTOTOテクニカルセンター内プレゼンテーションルームにて行われました。

審査方法は1次審査で選ばれた7作品の応募者が一組ずつ5分間のプレゼンテーションを行った後、審査員との質疑応答を10分間取ります。その後、審査員の投票によって各賞を決定していきま



プレゼンテーションの様子

2次対象者のプレゼンテーションでは、パワーポイントの説明+迫力のある詳細模型を持ち込んだ方がいたり、5分間という短い時間の中、秀逸なストーリー仕立てによって案を説明し

たりと皆さん、大変熱のこもった素晴らしい内容でした。私は司会者だったため、各プレゼンターの近くから拝見していましたが、思わず聞き入ってしまいました。

今回のテーマは少し難解だったせいか、応募数は昨年より減少しましたが、応募された方々は皆さん、戦争という重いテーマに対し「自分たちなりの回答、未来を何とか示せれば」という大変意欲ある人たちだったように思います。

審査経過ですが、最初の投票は各審査員が5点満点で各作品を評価付けし、最多得点を獲得した「戦後住宅の壁」が審査員協議の上、金賞に決定しました。その後、応募者の自己PRタイムを設け再度の投票で銀賞2点が決まりました。その他の作品はすべて銅賞に決定、審査員特別賞はゲスト審査員の大西麻貴氏の推薦により選出され、無事、全審査を終えることができました。

寺下 浩（JIA 岐阜）| 寺下浩一級建築士事務所



建築についていつもすごいなと思うことは、建築をつくることは前向きである、ということだ。土を掘ったり、柱を立てたり、屋根をかけたりといったことに大きなエネルギーが必要だということもそうだし、今ある環境の問題を解決したり、便利にしたり、豊かにしたりするような、大勢の人のたくさんの創意工夫が積み重なって、一つの建築に結実していく。病気になるために建築を構想する人はいないし、人を苦しめるために建築をつくる人はいない。

戦争というのはその反対で、人々が憎み合ったり傷つけ合ったり殺し合ったり、非難しあったり破壊し合ったり騙し合ったりする。そうした戦争が終わったあと、そこに生まれてくる新しい建築の姿はどんなものだろう？ というのが今回の「21世紀の戦後住宅」である。どんな戦争を想定するかはそれぞれの考えに委ねられているけれど、たとえどんな戦争が起こったとしても、そのあとには解決すべき問題、取り組むべき課題が山積しているだろうし、問題が切実であればあるほど、建築は本来持っている前向きな力を爆発させて、新しい未来を提示するべきだと思う。

金賞の「戦後住宅の壁」は、戦争によって苦しんだ人々が戦争

を乗り越えて行くためにつくられる家の提案である。堅穴式住居のような、あるいはインディアンのテントのような家は国境沿いに並んで建てられ、住む人は家の中を毎日ぐるぐるとまわるように暮らす、一種の瞑想の場のような空間だ。家は時間とともに家に絡み付く植物によって次第に覆われ、国境が緑に変えられて行き、住んでいた人は新しい生活に歩みだして行く。戦争が終わった後、一体どこまでが戦後なのか、という時間の流れを含む問いかけにはっとさせられたとともに、提案の静かさと愛情が印象的だった。銀賞の「FREE ADDRESS HOUSE」は、家未満の小さな部屋がばらまかれるようにして出来る、新しい集落のような住まいの提案で、インフラや人々の住みこなし方を含めたものに発展して行く可能性を感じさせられるものだった。同じく銀賞の「記念碑住宅」は、提案自体が神話のようで、まるでずっと昔の戦争の話を一枚の壁画、一つの遺構から想像させられるようなところがあって、そのユニークさが異彩を放っていた。受賞された方をお祝いするとともに、今まで私自身考えたことのなかったテーマについて考え、議論する機会を与えて下さったこのコンペに感謝したいと思う。

■大西麻貴氏 記念講演会



間瀬高歩 (JIA 愛知) | 地域計画建築研究所

設計競技のゲスト審査員を務めていただいた大西麻貴氏の記念講演会では、大西氏が設計された個人住宅、福祉施設、プロジェクト等の映像紹介を交え、建築に対する考え方をお話いただきました。

Good Job! Center KASHIBA (2016年) は、障がいのある人とともに、アート・デザイン・ビジネスの分野を越え、社会に新しい仕事をつくりだすことをめざして奈良県香芝市に開設された福祉施設です。内部は、多くの壁面、天井や家具を集めた構成によって、人の気配が感じられる一体的な空間、吹抜けが開放的なギャラリーや落ち着いた作業場所、特徴的な窓辺など、利用者のニーズに柔軟に対応できる環境が作り出されていました。

講演会の後半には、現在進行中の京都市立芸術大学移転整備プロジェクト【乾・RING・フジワラボ・o+h・吉村設計共同体】による設計の取り組みが紹介されました。

京都市立芸術大学では、建学以来140年にわたる質の高い芸術教育を継承し、市民に愛される大学として、まちとともに発展していくよう京都の玄関口であるJR京都駅東部エリアへの移転整備事業が進められています。京都芸大の基本方針を踏まえ、設計

共同体からは次の3つのフレームによるキャンパス計画が提案されています。

①『ひとつのまちが生まれ成長するように大学をつくる』②『つくる・つかう・のこす融合したプロセス』③『地域の生活空間と共にある有機的なキャンパス』——これらのフレームは、京都のみちと奥庭の特性をキャンパスに取入れ、まちとのつながり、キャンパス内のつながりを生み出す仕掛けが考えられています。高瀬川に沿って2つの創造軸を配置し、鴨川まで連続するランドスケープの考え方は、まちへ波及していく建築の可能性が示唆され、人と人、人と建築、人とまちとの関係が持続的に成長するよう計画されています。

講演会では、イギリスの小説家ヴァージニア・ウルフの著作『波』について触れられました。この小説では6人の男女のそれぞれの言葉、愛と憎しみ、喜びと悲しみ、生と死、陽は昇り、沈み、また昇る、人生のたゆたう波が描かれています。始終押し寄せる思考の波、波は砕けても、また寄せる、詩のような、絵画のような、音楽のような、たゆたう時間、スタディの積み重ねを空間に変えていく大西氏の建築プロセスが紹介されました。

2017年度 JIA 東海支部住宅コンペは『21世紀の戦後住宅』という出題テーマでした（出題者=西沢大良）。21世紀なのになぜ「戦後」なのかと、戸惑った方もおられたかもしれません。この場を借りて、出題意図について説明いたします。

応募要項の説明と重複しますが、過去の大きな戦争の直後には、つねに画期的な住宅が考案されてきました。コルビュジエの「ドミノ型住宅」（1929）は第一次世界大戦にとっての「戦後住宅」です（構想開始は1914年）。コルビュジエの有名なアクソメ図（スラブ・パイル・外部階段だけを描いたアクソメ図）は、ガラスのカーテンウォールによる近代住宅を意図したわけではなく、あの状態から住民がセルフビルドで壁や扉をつくるための躯体図です。コルビュジエの説明によれば、第一次世界大戦で多くの集落が瓦礫の山と化している、ゆえにその瓦礫を拾って住宅を再建していこう、その手がかりとなる躯体は自治体に提供してもらおう、よしんば粗大ゴミのような見かけの住宅ができたとしても、それが20世紀住宅の真の姿なのだ、という提案です。

バックミンスター・フラーの「ダイマクションハウス」（1944）は第二次大戦の渦中に登場した「戦後住宅」です。軍人でもあったフラーは戦時中に肥大化していく米国の軍需産業を目の当たりにし、その製造能力を民生品へ活かそうと考え、工場生産による空輸可能なプレファブ住宅を試作しました。あるいはチャールズ・イームズ自邸、いわゆる「ケーススタディハウス#8」（1949）も第二次大戦の「戦後住宅」です。今日の合板や合金や樹脂等の技術的達成は、両大戦なしにはありえなかったものですが、イームズはそれらを民生技術へ転換しようとしたデザイナーです。彼が傷痍軍人のためのギブスを航空合板でつくったり、軽量鉄骨やアルミや樹脂などで家具や住宅をつくったのはそのためです。

日本の戦後のいわゆる最小限住宅、「増沢自邸」（1952）や「清家自邸」（1954）や「SH-1」（1954）なども、第二次大戦にとっての「戦後住宅」です。どれも延床 40 m<sup>2</sup>程度の極小住宅ですが、戦

後の焼け野原に広がったバラックを最小限の介入で住宅に変えていくための提案です。これらの小住宅がなければ、その後の日本の住宅のあり方（庶民が独立住宅を所有するという欧米ではありえない住宅のあり方）は実現されず、また今日まで続く近代建築の多様な展開もなかったでしょう。

このように、大きな戦争の後に画期的な住宅が現れることは、必ずしも偶然ではありません。もともと建築（や土木）の技術的な起源は戦争にあるからです。古代ローマの建築十書（ウィトルウィウス）は多くの紙幅を費やして戦闘技術や造兵技術の重要性を述べています（第一書の築城術、第八書の用水灌漑技術、第十書の戦闘機械・工作機械の設計および攻城術）。あるいは近世の日本でも、武将のなかから築城の名手が登場したように、戦国の競合のなかで築城術や用水灌漑技術が格段の発達を見せ、戦後（江戸時代）の木造建築や土木事業の基礎となりました。私たちが建築史で学んできた建築や住宅は、洋の東西を問わず、また時代も問わず、戦争がなければ登場しなかったという共通点をもっています。このことは、20世紀において決定的な戦後住宅が数多く登場したことの理由を、裏面から説明するものです。以上の経緯と事例は、戦争と建築の影響関係について、多くのことをわらわれに教えています。

現在の日本では、世界中の戦場に自在に参戦できるように、さまざまな法整備・制度改革が進められています。昨年は南スーダンを含む海外の戦場で、自衛隊による実質的な参戦と戦闘行為が行われました。ちょうど今から80年前、第二次大戦直前に、いわゆる日中戦争（1937年）が海外の戦場を舞台に行なわれたのと類似しています。この趨勢が今後も続き、海外や国内で戦争がなされ続けるとき、建築を設計する人間は何をなすべきでしょうか？

なすべきことはたくさんありますが、このコンペではそのうちの1つ、『21世紀の戦後住宅』について設計者の皆さんに考えてもらい、公開で議論を行いたいと考えました。



西沢審査委員長のコメント



学生からの作品説明

金賞

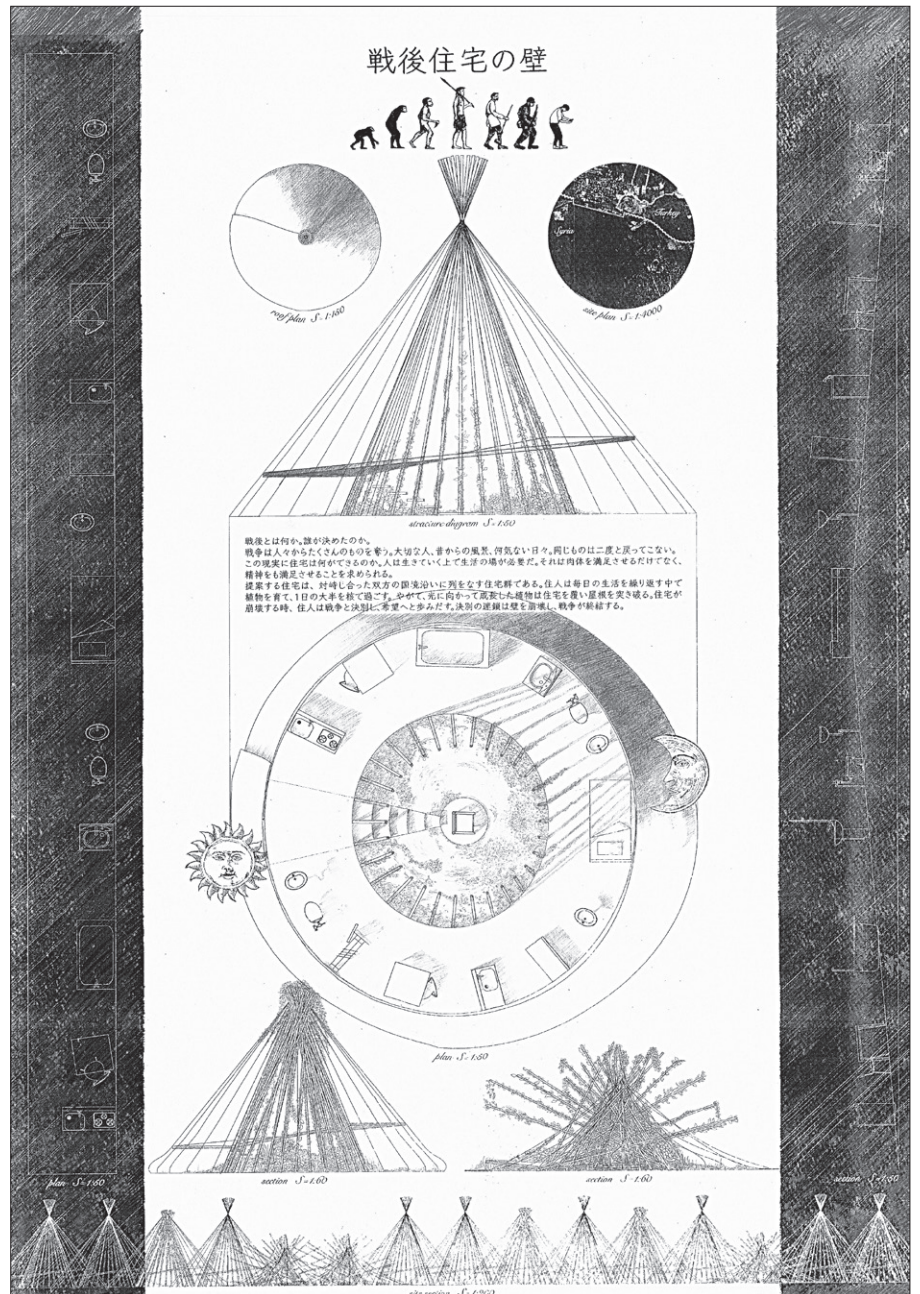
## 「戦後住宅の壁」

前田真里 (名城大学)

藤城太一 (名城大学)

金賞をとった『戦後住宅の壁』は、中東のシリアとトルコの国境線に沿った提案で、1次審査の段階から注目を集めた応募案だった。ただし提出シートの寡黙さのせいもあり、評価が二つに割れた問題作でもあった。私は当初は必ずしも評価していなかったが、その理由は、ここで示唆されている戦争形態が、のどかな時代の国境抗争のように見えたからだ。というのも今日シリアでなされているいわゆる対テロ戦争では、遠隔操作された無音のドローン(米軍の無人機)が国境線を越えてシリアのベッドタウンの上空に滞留し、普通の住民を無作為に空爆していくという、一方的な破壊や殺傷が繰り返されている。いわば無人兵器と市民の間で戦争が続けられ(といっても市民は武装勢力ではなく普通のベッドタウンで子育てをしている人々である)、最新兵器と非武装市民が交戦状態にある。シリアを敷地にするならば、これを無視できないのではないかと、当初の私は考えていたのだ。だがこの作者たちの解説文には短いながらも迫力があり、寡黙なドローイングにも不思議な長期的なプロセス(戦後住宅が別のものになるまでのプロセス)が丁寧に描かれており、決して無知な若者の提案には見えなかった。そのため2次審査で本人の考えを確かめたいと思うようになった。

2次審査での作者によるプレゼンは、「戦争と決別する」ために何をなすべきかを、住宅設計者の立場から訴え、応募者中最も迫力のあるプレゼンとなった。戦争終結後に国境線上に両国の被災者や難民の仮説住宅が立ち並び、それらが数十年の月日をかけて崩壊し、その廃墟が緑道になっていくというプロセスが説明され、その節目の決



定の一つひとつについて、「戦争と決別するためだ」「戦争を記憶したまま決別するのだ」という強いメッセージが幾度も発せられた。このプレゼンを聴きながら私が気づいたのは、彼らの放つ異様な迫力は、戦争にたいする「当事者意識」から生じているということだった。

今日メディアに溢れている戦争をめぐる議論は、「誰かが起こした戦争に自分たちが巻き込まれる」という、一種の被害者意識を多少なりとも含んでいる。だがこの作者はそうではない。誰が起こした戦争で

あっても自分たちが止めてやる、そして国土修復であれ生活再建であれ自分たちがやってやるという「当事者意識」に貫かれていた。そのことが、彼らの計画に稀有な輝きをもたせることになったと思う。たしかに強い「当事者意識」がなければ、どんな知識も戦争を止めることにはつながらず、どんな計画案も目的を達成することはないだろう。戦争を誰かのせいにしたままで、終結させられるわけがない。審査員長として、かくも意識の高い若い人々を顕彰できたことは、誠に光栄である。(西沢大良)

## 銀賞

### 「FREE ADRESS HOUSE」

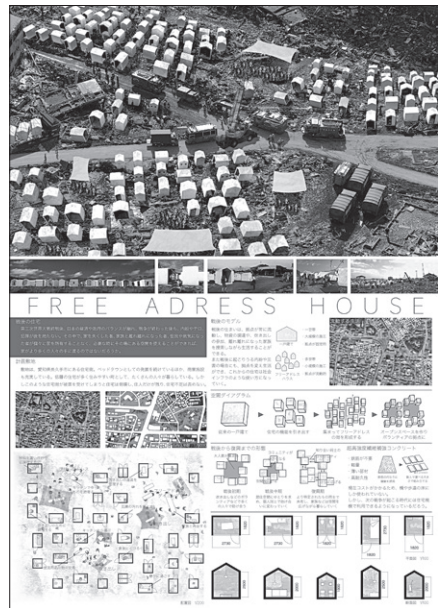
山下陽輝 (大同大学)

オフィスにおいて固定席を設けない座席配置を示すフリーアドレスの考え方を、戦直後～復興期の「戦後住宅」に適応した案。

超高強度繊維補強コンクリートでできた個室単位の小屋を離散配置し、戦中離ればなれになった家族が互いを探しながら小屋から小屋へ点々と移住する、というストーリーである。

審査員からは具体的な素材を想定していること、時間軸を意識した提案であることなどが評価された。個人的には特に、戦直後のフリーアドレス状態が、時間を経て家族が見つかり生活が安定するに連れ徐々に固定化し、初期にあった小屋間のオープンスペースが個々の空間へ充たされていく……という説明に、その風景を想像でき、説得力を感じた。

一方で、インフラに対する考え方や対象敷地の選定には疑問や指摘があった。①被災者数よりも過剰に小屋を供給する事のリアリティは？②戦後の不安の中で、空間を占有したいという本能的欲求はないのか？③長久手という帰属意識の低い地域に戻ってくる可能性があるのか？④インフラを考えると、配置にもっと制約が出るのではないのか？⑤フリーアドレスであることによりテロ犯や反政府組織が潜伏する余地を与えてしまうの



では？——質疑応答時間内ではすべての疑問を解消するまでに至らなかったが、南川審査員から「学生から追加の意見、主張があれば」との問いかけに進んで挙手し応えてくれたことで、私としては疑問を魅力が上回り、当初より投票点を増やした。

後から聞けば勇気を振り絞っての挙手だったそうで、食事のものを通らないという。銀賞受賞自体はもちろんだが、でもそれでも手を挙げる、という挑戦にもエールを送りたい。(水谷夏樹)

## 銀賞

### 「記念碑住宅」

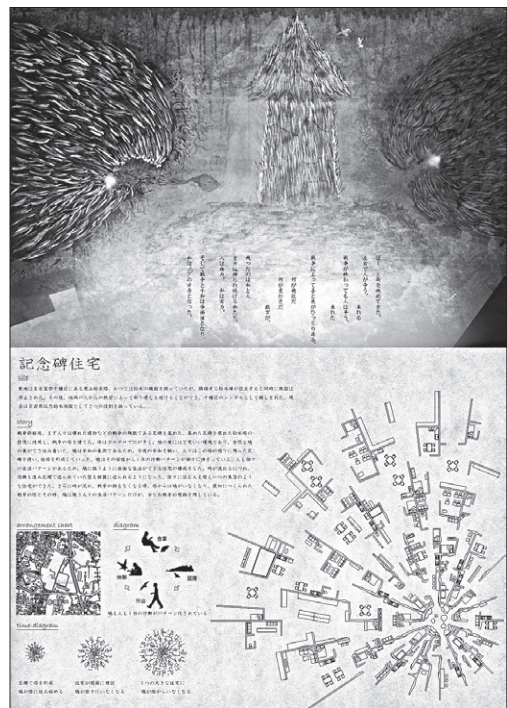
森 亮太 (名城大学)

梶浦悠翠 (名城大学)

1次審査の段階で最も異彩を放っていた応募案。とりわけパネル上半分にレイアウトされたドローイングの印象が強烈で、「この人に会ってみたい……」という思いを審査員一同が共有していた。

2次審査におけるプレゼンは一種のライブである。1次審査で受けた印象を良い意味で裏切り、イメージをより遠くへ飛ばすことができた案が評価される傾向が強い。そういった意味でこの案は「戦後住宅の壁」に及ばなかった。

戦争で壊された瓦礫を集積して、東山給水塔を修復しながらその足元には放射状に広がる住居を形成する。そこでは平和の象徴である鳩の行動パターンと人々の生活がリンクしており、復興に伴い戦争の痕跡がなくなるにつれ鳩が去っていくという設定。こうして文章にしてみるとそんなに違和感がないのだが、なぜかプレゼンを聞いたときには腑に落ちなかった。むしろ鳩と給水塔の関係がうまくつながらず、鳩の話はなくても良いのではと感じたほどだ。ドローイングはもちろん、そこにコラージュされた給水塔を擬人化した短い文章に私は強く惹かれていた。2次審査におけるプレゼン時にはほ



とんど語られなかったが、この案の魅力は「戦争」をする人間の愚かさを告発したその文章とドローイングに集約されていたと思う。そこで語られた内容をもう少し前面に押し出していたならば、結果は異なっていたかもしれない。(南川祐輝)

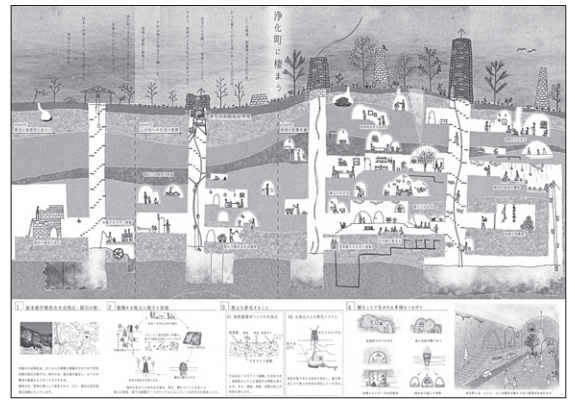
## 銅賞

### 「浄化町に棲まう」

筒井 伸 (信州大学)  
斎藤知真 (信州大学)  
伊藤一生 (信州大学)

この提案は、戦争によって核で汚染された町を、地球の新陳代謝を利用して浄化する建築の役割を描こうとする。巨大地下採石場に避難した人々は、地下空間や大谷石の特性を生かしながら生活環境を整え、大谷石に含有するセオライト鉱物の除染作用、煙突のベンチュリー効果によってユートピ

ア化された地上を目指す提案である。地下熱や地下水の利用、雨水ろ過システム、ヴォールト形状の地下構造物など、よく考えられた秀作であり、綺麗にまとめられたプレゼンテーションが集落的な風景を想起させてくれるなど、2次審査に残った作品の中でも完成度の面で1・2を争う作品であった。反面、綺麗にまとまっているが故に提案自体が漂白されてしまった印象も残った。地下採石場の荒々しく力強い空間性や、長期的な除染による地上の自然環境・生態系の変化など、生々しい現実を描くことによって「21世紀の戦後住宅」



への問題提起として批評性を高められただろう。力量を感じさせてくれる作品だけに、彼らの今後の活躍にも期待したい。  
(栗本真彦)

## 銅賞

### 「軍港住居」

小澤巧太郎 (東京大学大学院)

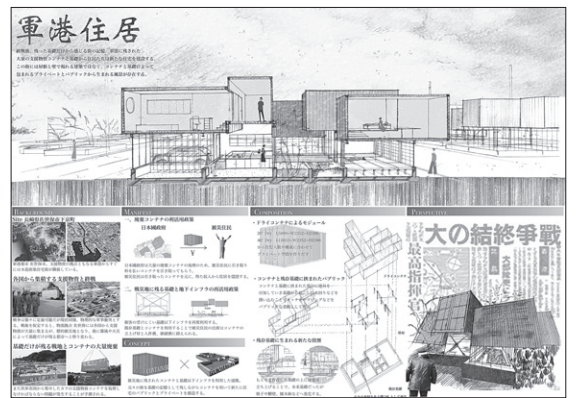
軍事衝突後に残る建物の基礎と支援物資運搬後の廃棄コンテナを活用。私的空間とするコンテナを基礎群上に浮かせピロティを形成、その下に残存基礎と配管を利用した生活の場を据え、地域と横つながりの場を持つ住居を提案している。

捉え方の難しい課題に対し、コンテナと

いう非常に具体的なものを見出した点が秀逸。戦後の応急措置のために生まれた空間が、その後の時代にもこの住居ならではの暮らしを期待させる。

願わくば、コンテナを浮かせる手段にも有効な提案があったなら、と思う。コンテナや残存基礎の提案の鋭さによりピロティの支柱が必要以上に軽快でおしゃれ(贅沢なファンタジー)に見えてしまったことが惜まれる。

(塩田有紀)



## 銅賞

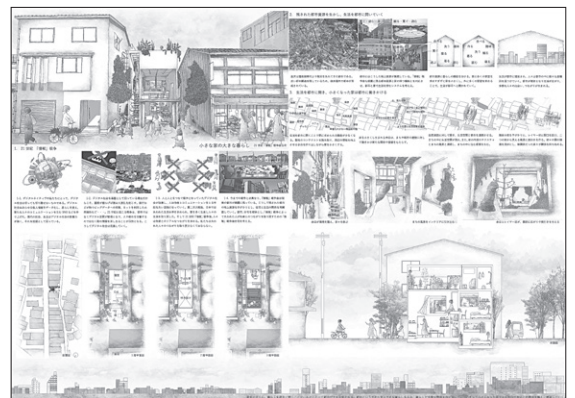
### 「小さな家の大きな暮らし」

西川公貴 (金沢工業大学大学院)

今回の応募案の中で最も丁寧な計画された住宅。綿密に書き込まれたドローイングも美しく、プランはシンプルでありながら内部から外へ向うレイヤー窓の操作は秀逸だった。施主さえいれればすぐにでも実現可能な案である。

「情報」戦争後、寸断されたネット環境の

代わりに失われた他者とのつながりを取り戻すべく、建物の周囲に余白をつくり云々……とあるのだが、こういったつながりは今でもそこかしこに残っている場所はたくさんあるし、コミュニケーションを促す方法としての余白の作り方があまりにステレオタイプな気がしてならない。決して間違っているわけではないけれども、真正面から正論を言われるとかえってイメージが膨らまない場合もある。建築に限らず、ものをつくるに当たってオリジナリティというのはその人の不器用な部分だと私は考えている。この作者にはテクニックは備



わっているが、良い意味での「毒」が足りないように感じた。自分の内臓を自ら取り出すようにして表に晒す、という行為に挑んでみてはどうだろうか。  
(南川祐輝)

## 銅賞・ゲスト審査員特別賞

### 「多国籍化する居室」

平野晃平（京都大学大学院）

戦争によって祖国を追われた難民の人々を受け入れる集合住宅の提案。地元に住む人とやってくる人と一緒に住むということが、螺旋状に2種類の空間がからみあう外観に表れているところがこの案のよいところだった。まちの中に、他のマンションとは明らかに違う、パワーに溢れた建築がたち上がっていて、違う国の言葉が飛び交うのが聞こえてきたり、料理の匂いがしてきたり、いろんな洗濯物がはためいたりして、周りに住む人々も「あそこはなんか面白そうなことが起こっているな」と徐々に巻き込まれていくような暮らしを想像した。

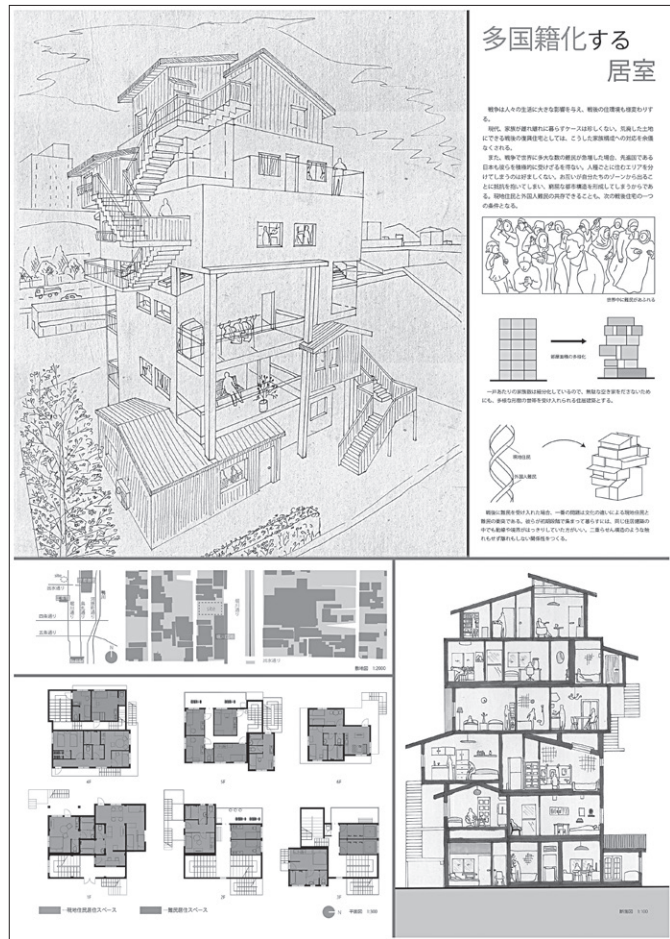
一方、楽しそうな外観や断面図と比較して平面図は少し単調で、難民の人々の家の部分がとても小さなワンルーム空間になっていた。地元の人々の家は一般的なマンションのような寝室とリビングで構成されていたり、お互いのスペースは比較的是っきり分かれていて関係性が見られなかったのが残念だった。

東日本大震災のあと、避難されている中学校に泊めていただいたとき、本当にありあわ

せの仮設のお風呂の一角にお花や岩を組み合わせさせて露天風呂のような雰囲気をつくっているのを見たことがあったのだが、どんな一時的な住まいでも、どんなに普段と違う暮らしでも、人間は自分たちの暮らしを豊かにしよ

うと創造力を働かせるものなのだと思う。そうした創造力を建築が後押しするような、住人が新しい住まい方を使いながら発見していくような家になるともっと面白いと感じた。

（大西麻貴）

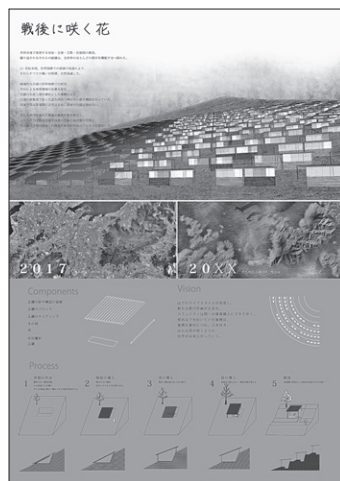


## 奨励賞



### 「The terrain of war」

中島生幸（九州大学）



### 「戦後に咲く花」

内藤卓郎・春田隆道・平井優輝（北九州市立大学）



### 「20xx年 未来型最少単位住居」

中田智徳・池田 匠（工学院大学）

## 戦後を建築で示すこと

前田真里 | 名城大学理工学部環境創造学科  
藤城太一 | 名城大学理工学部建築学科



### ●戦争と私たちのキヨリ

『21 世紀の戦後住宅』初めて聞いたとき、「あ、もうすぐドラえもんが生まれる時代になるなあ。」なんて思ったのを思い出した。ずいぶんと平和ボケした私たちは戦争から限りなく遠い場所で生きていることに気づかされた。理由を考えたとき、私たちの周りには戦争体験者がおらず特別な存在になっていることに気付かされた。世界では戦争や紛争があちこちで起きているけれど、私たちには関係ない。「実は私たちが日常生活を送るだけで戦争に加担しているんだよ。」と言われても想像ができない。修学旅行で広島平和記念公園などを巡るものの、どうも事実として受け止めることができなかった。戦争はおぞましいものだ記憶に刻んだだけだった。だから、私たちは戦争ともっと近い場所で生きるべきなのではないかと思った。

### ●戦後という違和感

戦争未経験者の私たちにとって「戦後」という言葉が引っかかった。今は私たちにとって戦争が起きた後なのか、前なのか、それとも最中なのか。私たちは「戦後」の定義を住宅で示そうと考えた。住宅は自然から命を守り、心に安定を与えるものである。その役割は戦争が起きたときでも変わらない。しかし、戦争経験者にとって、心の安定はより強くより住宅に求められるように感じる。大切な人やものを失ったとき、時間が止まってしまうという。それでも、人は生きるために肉体を満たす必要がある。毎日生活を繰り返す中で住人が戦争と決別し前へ進むための装置を住宅に付加することにした。

### ●植物という装置

植物は時間の経過とともに成長していく。植物が住宅の構造部にまわりつき、光に向かって成長する姿は住人にポジティブな何かを訴えたと考えた。成長した植物はやがて構造部の中心を突き破り住宅を崩壊させる装置となる。長い時間は戦争から住人を決別させることを期待する。

### ●崩壊の連鎖と住宅の壁

国境というのは両国の民族が避難してくる極めて特異な性質を持った場所である。戦争により強められた国境を敷地とすることによって、社会により大きな影響を与えることができると考えた。長い時間をかけて崩壊した住宅の連鎖は、両国にまたぐ壁の崩壊となるとともに緑の道として残される。日常の風景となる緑の道は後世に戦争の記憶を可視化させ、戦争未経験者と戦争のキヨリを縮める。

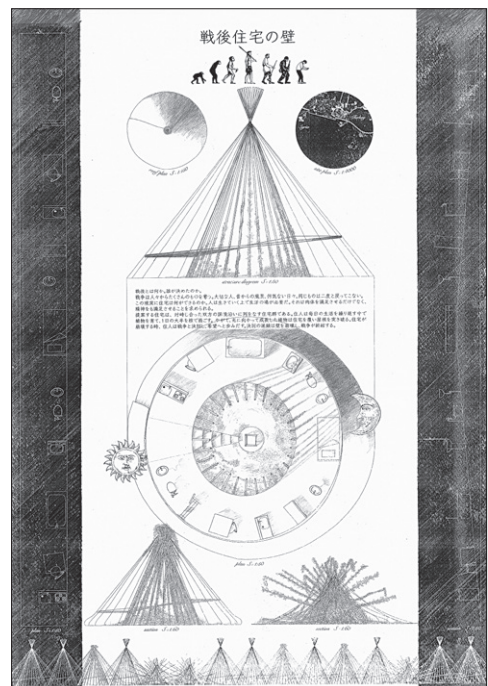
### ●提案するストーリー

戦後とは何か。大切な人、昔からの風景、何気ない日々。同じものは二度と戻ってこない。提案する住宅は、戦争と住人が決別するための住宅である。

人は生きていく上で生活の場が必要である。それは肉体を満足させるだけでなく、精神をも満足させることが求められる。そこで私たちは永遠軸と時間軸という2つの軸を考えた。永遠軸とは生活を繰り返し1日 が環となりルーティンとして過ごせる生活空間となる。時間軸とは住人が変化していく場でありドーナツの穴にあたる。住人は毎日の生活を繰り返す中で過去・現在・未来を思い描き、大切な人、昔からの風景、何気ない日々を思いを巡らす。その中で植物を育て、1日の大半を精神空間で過ごす。長い年月を経て、光に向かって成長した植物は住宅を覆い屋根を突き破る。タガを外し住宅が崩壊するとき、住人は戦争と決別し、希望へと歩みだす。敷地は、対峙し合った双方の国境沿いを選んだ。住宅は列をなし、決別の連鎖を起す。住宅群が崩壊したとき、社会は戦争と決別する。植物が溢れ出し住宅が崩れてできた緑の道。新しい国境は対峙していた国と国をゆるく結ぶ。手に触れられるキヨリにある戦争は形を変え後世に受け継がれる。

### ●最後に

今回 JIA 東海支部設計競技に参加させていただき、審査員の先生方、同世代の方々との新しい出会いができ、とても嬉しく思います。頑張った考えた私たちの作品が審査の中で「あるかもしれないと思われた」「緑の道として残る姿が力の弱い者たちの抵抗にも思える」という言葉がとても嬉しかったです。作品に共感していただき、評価していただきました審査員の方々、その他関係者の皆さまにこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



作品名「戦後住宅の壁」

## 「谷尻誠氏」講演会『意識のデザイン』

11月17日、建築文化研究会にて谷尻誠氏をお招きし、講演会を開催しました。講演会には多数の方から応募いただき、また静岡で開催される講演会としては珍しく、多くの学生さんに参加いただきました。

谷尻誠氏の講演は、私が今まで聞いた建築家の講演とは全く違うものでした。多くの建築家がコンペ当選案、実施作品などを紹介しますが、谷尻氏の講演内容のほとんどは落選案。実現しなかった案を中心とした講演内容でした。はじめに谷尻氏の考え方、モノの見方、感じ方について話をしたあと、その考え方をもとにどのように案をつくっているのか話始めた谷尻氏。その内容はデザインに何が大切か気づかせるものだったと思います。コンペ落選案や実現しなかった計画案は、建築家にとって表の光を浴びなかった作品になります。このような作品一つひとつにも建築家の思いがあります。考えがあり、伝えたいことがあります。「これはここだけに…」と言って話し出す、本来は見ることに、聞くことのできない谷尻氏のこれらの作品についての話は、とても貴重で面白く、ワクワクするものでした。また、プロジェクトコンペ

に負けた結果、他の仕事につながった話は、常に自身の考え方を発信し、妥協しないことの大切さを再確認させられるものでした。

谷尻氏の講演の終盤に東京銀座のお寿司屋さんの話がありました。1万円の指輪から1万円の靴下までの価値観。確かに1万円の指輪は安い。しかし、1万円の靴下は高い。そんな価値観を空間にしたお寿司屋さんは、100万円のまな板と廃材のカウンター、そして何千万円のアート作品が数点。高い1枚板のカウンターを使用したお寿司屋さんはよく聞きますが、話を聞いているだけで行ってみたい。と感じました。

講演が終わり、谷尻氏から感じたことは建築を楽しんでいるということです。大学時代、建築を学ぶことは楽しいことでした。それを社会に出て仕事として責任を負うようになって、少し忘れかけていたように思います。「建築は楽しい」という感情を思い出す、そんな講演会だったと思います。そして、デザインに大切なものは、「価値を見出すこと」、デザインする人にとって個々の価値観が大切である、ということを感じました。

私自身、経験を重ね、年齢を重ねるこ

とで固定概念が強くなったように最近感じていました。そんな私にとって、谷尻氏の講演はとても刺激がありました。発想の転換により価値を生み出す。冒頭、谷尻氏は「物の見方は自分次第」「名前を取ることで、機能は拡張される。それとは逆に名前を付けることも大切。名前を書いただけで、そこに機能を持たせることができる」という話をしていました。しかし、それは考え方、デザインの仕方によっては極々普通のことなのだと思います。そこをどのように考えるか、それがデザインの第一歩だと思います。

谷尻氏の講演の中で、私がおっとも印象に残った言葉が2つあります。一つは、「自分のダメなところを利点にすることも意識のデザイン」ということ。もう一つは「自分たちの案をしっかりと見てもらうことが重要であり、謙虚でなければならない」という言葉です。

当たり前かもしれませんが、建築をやっていく中でこの意識を大切にしていきたいと思います。



石川正子 (JIA 静岡) | 高木滋生建築設計事務所



谷尻氏講演の様子



講演会としては珍しく、多くの学生が参加

## 『ROKI Global Innovation Center —ROGIC—』

11月5日、2016年度のJIA日本建築大賞を受賞した『ROKI Global Innovation Center —ROGIC—』の見学会および講演会を、小堀哲夫氏(小堀哲夫建築設計事務所代表)を招いて行ないました。JIA東海支部会員のほか、JIA他支部会員、一般(建築従事者)、学生と多数の参加者が全国から集まりました。

この建築は、自動車エンジン用フィルターなどの開発・製造を行う(株)ROKIの研究開発施設で、「創造性を最大化する建築」をテーマに、全く新しい開発が生まれる場所を目指しています。「与えられたテーマを形にする」受動的な環境から「テーマそのものを探す」主体的な環境へ切替えるため、人が働く場所と機械が働く場所を分離し、働く人たちが自然の変化や気持ち良さを体感し、「環境の変化」が「創造性」を生み出す新しいオフィス空間のあり方を具現化しています。

敷地は、静岡県浜松市内にある恵まれた自然環境の中で、天竜川に南面する小高い段丘の上に位置し、谷を駆け上がる風が常に吹いています。この敷地が持つ環境の良さを最大限体感できる場所が作り出されています。建築の階高は限りなく抑えられ、地形を生かした低層なオフィスは、周辺の木々に見え隠れし建築の存在感を和らげています。建物全体は一つの曲面状の屋根で覆われた大空間で構成され、どこにいても働く人たちは一体感を感じとることができ

ます。光と影がグラデーションした空間の中で、棚田状に配された各階と吹抜けを二重に設けることで、建物の中にさまざまな特徴のスペースを生み出しています。特徴的な光天井は、同社のフィルターを使用し木格子とスチールを中心に構成され、時間や季節で変化する天気や空模様を透過し内部に映し出しています。最下階の引き戸を開けると大屋根の湾曲に沿って天竜川から山側へと抜ける心地よい風を感じられました。天井高の変化、通風や日照、空間の明暗、温熱環境の差などをあえて不均一にした多様な環境の中で、居心地の良い「仕事場=環境」を自由に選択しながら、人々が生き生きと働いている様子が想像されました。

設備設計を担当された元アラップの持田さまにもご登壇いただきました。「人がどう動くのか」「人の許容温度の広がり」に着眼し、日射量と熱環境のバランス、室内の風の流れ、天竜川からの風を利用したクールトレンチなどをご説明いただきました。計画当初から、「建築デザインからのアプローチ」と「環境エンジニアからのアプローチ」とを同時に考えていく手法を取り、数字では測れない「環境・場づくり」による省エネルギーを考え、自然エネルギーの活用を心掛けたそうです。

講演会では、「ユニバーサルスペースのあり方」について、20世紀は「効率性・均質

性・固定的=ワンルーム」でしたが、21世紀は「(人間の心地良さを含む)環境をどう作りこむか」が重要と説明がありました。「曖昧性・不均質(むら)・流動的=おおらかな空間」と考え、アプローチの仕方も20世紀の「技術」から21世紀は「人間環境」を起点とするよう考えているそうです。また、「実現したい社会」として、①主体的に生きる、②人間の感性を信じる、③自然との対話—を挙げられ講演を締めくくられました。

その後、質疑応答が行われました。「クライアントとのコミュニケーションの仕組み」について「完成後のROKI社エンジニアへのアンケート結果と調整・対応」の解説があり、「今まで携わった研究施設との違いを教えてください」との質問には、「人間がどう感じるか」からアプローチしたと回答されました。また、学生からは、「学生時代の経験が現在へ影響をもたらしている点」について質問があり、趣味の「山登り」で感じた自然の凄さや、歴史研究の「集落調査」で触れた住民の建築やまちへの愛情、住まい手との建築の成立する土壌についての重要性について説かれ、幅広く興味深いお話を聞くことができました。

見学会と講演での丁寧な説明とその熱意、クライアントと建築家の間の深い信頼関係、「自然(光、風、熱)」をフィルトレーション(濾過)する建築を具現化した高い完成度、その果敢な挑戦にはすべての参加者が感動と感心に満たされたと思います。

講演で何度も出てきた人間の感性による「愛・希望・感動・楽しさ・気持ち良さ」といった実に直感的な言葉が印象的でした。

最後に、(株)ROKIさまには今回貴重な機会をいただきありがとうございました。

西村和哉 (JIA 愛知) |  
h+de-sign / architect



すべてのフロアが俯瞰できる4階からの視線 (撮影: 新井隆弘)

## 知る・学ぶ・楽しむ

11月22日、23日の2日間、JIA 愛知法人協力会と事業委員会共催による研修見学会を開催した。早朝、名古屋駅に集まったのは、1歳～95歳までの世代を超えた28名。所属も世代も違う建築家の方々と共にする2日間に期待し、心が弾んだ。でも、本音のところは、「何事もないように……」と願うばかりであった。

最初の研修先は、茨木市にある「エスケー化研㈱SKKグローバルセンター」で最新塗料技術と新化学建材を学んだ。次に神戸市にある「ナブテスコ㈱甲南工場ショールーム」へ場所を移し、最新の自動ドアと安全対策を学んだ。両社では、貴重なレクチャーを受け、実物を体感し、知見を広げることができた。また、両社が取り組む商品開発力、先進性に感服するばかりであった。このように実際に足を運ぶ研修見学会の有用性をあらためて再認識した次第だ。そして一行は淡路島へと渡り、安藤忠雄氏設計の「本福寺」を視察し、宿泊先の「TOTOシーウインド」では、やはり、安藤建築談義が尽きることはなかった。

2日目は「淡路夢舞台」の視察から始まり、2日間に渡る安藤ワールドを堪能した。そして時に追われ、安藤建築の余韻を持ち帰るかのよう、慌

ただしく神戸へと移った。神戸では一転、「竹中大工道具」の都会に佇む静寂な異空間を静々と味わった。空間の展開、つくり込まれたディテール、素材表現、ラン



エスケー化研グローバルセンターでの集合写真

ドスケープに至るまで圧巻であった。その後、新神戸オリエンタルアベニューでランチを楽しみ、最後の視察先、小野市にある「国宝浄土寺」に向かった。時はあっという間に過ぎ、夕日に光輝く浄土堂と後光に浮かび上がる阿弥陀三尊立像の美しさに酔いしれた。この2日間は本当に濃密であったが、足は軽く、充実感に満ち溢れていた。

このツアーの見どころレポートは他の執筆者へ任すとし、この企画が成功裏に終わったことは、法人協力会の皆さま、そして、四辻会長、中嶋会長代理のご尽力によるところが大きい。感謝するとともに来年も充実した研修見学会を協働したいと思った。

高木耕一 (JIA 愛知) |  
東畑建築事務所



## 淡路島、安藤忠雄建築を巡って

私にとって初めて参加させていただいた見学会で、特に印象的であった安藤忠雄氏設計の本福寺水御堂、TOTOシーウインド淡路、淡路夢舞台について書きたいと思う。

初日に訪れた本福寺水御堂。チャーターバスを降り、駐車場からの坂道を登っていくと、普通に想像する寺とはおよそ似つかわしくない巨大なコンクリートの壁が目前に現れる。その壁を、舞台袖から出るように迂回していくと、目の前に蓮池が現れる。蓮池に潜るように続く階段を降りれば、朱色に塗られた空間に、薬師如来像が安置されていた。ドライエリアから降り注ぐ光は空間をより一層、朱色に染め上げていた。残念ながら蓮の花が咲く季節ではなく小雨も降っていたが、水盤に映る波紋は時間の流れを感じさせてくれた。

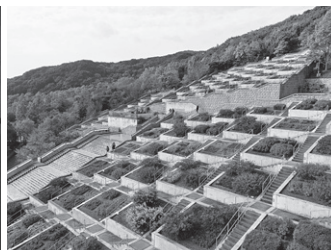
次に宿泊先でもあるTOTOシーウインド淡路だ。われわれが到着した



本福寺。蓮池に潜る階段



朝日が射しこむ TOTO シーウインド



淡路夢舞台の「百段苑」は圧巻

ころには日も落ち、あたりも薄暗くなっていた。部屋までの移動は方向音痴の私にはいささかわかりづらかった。夜には美味しい料理と先輩諸氏から叱咤激励があり、また、強者たちによる建築議論が夜中まで続いた。夜遅くまで語り合ったわれわれの目を覚ましてくれたのが、朝日とそれを受ける建物であった。夜にはわからなかった建物と海、朝日との対比が浮かび上がり、多くの人がカメラを構え、その美しさに見とれていた。迷路のように感じた平面計画も日の光が建物の中まで伸びてくると単純なものに思えるから不思議だ。

最後は淡路夢舞台。「百段苑」と呼ばれる外部庭園は圧巻だ。この圧倒的な、文字通りのボリュームを設計することは如何に大変か想像に難しくない。施主にプレゼンし、設計し、現場ではさまざまな調整を行い、完成後には維持管理と、建物にかかわる人たちがそれぞれに役割を果たしているからこそこの建物だ。

最後にこの場を借りてこの企画を立案、実行いただいた皆さまに御礼申し上げます。

篠原慶直 |  
小堀哲夫建築設計事務所



## 竹中大工道具館・浄土寺の見学の所見

今回の旅行に参加することができて、大変よかったです!! まずは、素晴らしい見学の機会を与えてくださった皆さんに感謝申し上げます。

まずは竹中大工道具館の見どころから紹介します。建物は3年前に神戸市中山手から新幹線「新神戸駅」のロータリー広場に面した位置に移り、敷地全体が緑に囲まれた環境にあります。地上1階地下2階建てで、内部は床が木カーペット、壁は版築の土壁、天井は木の仕上げです。空間構成は、中庭を囲んだ順路に従い、順次地下へ誘導するようになっています。日本建築に必要な大工道具・左官道具や海外の大工道具などが展示されており、動画で各種道具の使い方が放映されています。また安井空工務店作成による茶室の構造模型や唐招提寺金堂の実物大模型(西岡常一棟梁指導、鶴工舎作成)なども展示されていて、大変に勉強になりました。別棟に無料休憩所・茶室「一滴庵」(数寄屋大工笛吹嘉一郎作、竹中家の茶室)があり、和風庭園と調和のとれた構成になっています。

次に浄土寺(国宝)です。兵庫県小野市内にあり、高野山真言宗の寺院です。本尊は薬師如来、阿弥陀如来。開山は重源で建久年間(1190~1198)の創建(ウィキペディアより抜粋)です。東大寺西院といわれている寺院で、この寺院に関しては、日本建築学会の修士論文・博士論文など多数発表されていますので、概要についてはそちらを参考にしてください。われわれは夕方、ボランティアのガイドさんによる案内で境内にあ

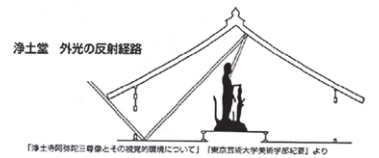
る本堂(薬師堂)、開山堂、八幡神社、それと国宝である浄土堂を案内していただきました。それぞれの建物で趣のある様式が用いられていて、特に本堂と浄土堂は大仏様(挿し肘木が柱を貫通して構成されている様式、別名天竺様)といわれる様式で創建されているそうです。当初は曇りで内部は薄暗くあまり感動しなかったのですが、だんだんと晴れてくると、先ほどの様子とは一変して、阿弥陀三尊像に後光が射し、薄暗い空間から明るい空間へと変化する体験には大変感動しました! 安藤忠雄氏設計の水の教会、光の教会、本福寺水御堂などは、この御堂から西から光を取り入れるというアイデアを得たそうです。

竹中大工道具館も浄土寺も、もう一度体験したいと思える空間です。ぜひ見学されることをお勧めします。HPなどで予習をして見に行くことより楽しめます。

吉川法人(JIA愛知)|吉川法人+都市建築デザイン室



浄土寺浄土堂の外観



浄土堂 外光の反射経路

「浄土寺阿弥陀三尊像とその後光の機構について」『東京芸術大学美術学部紀要』より

光の入る角度も計算され、つくられている



竹中大工道具館。様々な大工道具が並ぶ



## 『建築家+』編集者として

JIA愛知が『建築家+(プラス)』という小冊子をつくりました。建築家の職能を一般にわかりやすく伝える目的で、話し合いを重ねて発行にこぎつけたものです。私はその編集に携わっており、研修見学会には会員の方の活動を知るために参加しました。結果『建築家+』に「研修見学会で建築家のみなさんに聞きました」というページを加えることができ、多様な建築家の「顔」を楽しく伝えられたと思います。同じ編集者で見学会に参加した伊藤幸子さんも私も、小さい娘を連れての取材でしたが、みなさんには笑顔でお応えいただき感謝しています。

さて、安藤忠雄氏設計のTOTOシーウィンド淡路は、人の感覚を揺さぶる空間として出色のものでした。宿泊する部屋のキーをもらって向かうとき、まずフロントから大窓に面する幅広階段を下りるのにエレベーターが見当たらない。小さな娘は抱っこし、荷物を載せたベビーカーはみなさんの手を借りて階下へ運びます。その先、小雨が降っていますが屋外にあるエレベーターで目的階に移動します。ここからが難しい。階の見取り図を確認して案内に従って進むのに行き止まり。「おかしいね」と二度ほど行っ



「研修見学会で建築家のみなさんに聞きました」

『建築家+(プラス)』  
2018年1月発行

たり来たり。「いや絶対この通路のはずだ」と見回すと、テラスに出る「非常口」と書かれたガラス戸があります。とても重かったそれを押し開いたところに部屋の入り口があったのです。正直なんて分かりにくい! と思いましたが、人に話したくなるおもしろい旅の話題としてはNO.1のそれは悪いものではなく、よい建築って何でしょうか? 編集者として建築家の心の中をこれからもほじくってみたいと思います。

寺井真理 | テラススタジオ



## 伝統工法で家建てる 飛騨の大工と話す

2017年10月28日に開催された愛知地域会研修委員会主催の岐阜県高山市を訪れた建築見学ツアーは、停滞する台風22号の接近を気にしつつJIA会員12名、その他15名(内学生6名)の総勢27名が参加した。年齢も20才から87才と3世代に相当するほど幅広く、参加者間の交流もごく自然に生まれ、有意義な時間を持てたことに感謝したい。

佐藤和正 (JIA愛知) |  
野口建築事務所



❖今回は参加した学生さんの学生目線でのレポートをお願いしてみました。また、現地で伝統工法や建物の説明をしていただきました。井口泉さんが本年度の「現代の名工」に選ばれましたことも合わせて報告させていただきます。

まず見学させていただいたのは、東海・ビルドさんの保養施設である「高山町屋惣四郎」。飛騨高山の伝統的家屋が、飛騨匠に伝わる技術とコンクリートを仕切り壁に用いるなど、飛騨の伝統建築とモダニズム建築が融合し、見事に改修されていました。また、母屋と裏にある蔵が檜のお風呂場とつながられ、蔵は寝室へと生まれ変わっていました。分厚い壁で覆われた蔵の寝室は、安心してぐっすり眠り

につけそうです。また土壁に施されたデザインや設備機器の納まりなどに、訪れる者を飽きさせないデザインの美しさと細部までこだわる職人芸を感じました。日本らしさを残しつつ、現代の新しい技術と融合させ、新しいものをつくることは、今後自分たちが学ぶべきものであると思います。実際に建物を改修された大工の井口さんは、私が想像していた気難しい職人のイメージとは異なり、表情も語り口も穏やかで、質問にも丁寧に答えておられました。その中で井口さんがふと口にした「今は伝統工法ができる若い大工が少ない」という言葉が印象に残っています。これまで受け継がれた日本の伝統が薄れかけていることを真摯に受け止めなければいけないと思いました。

次に、ともに国の重要文化財である「日下部民藝館」と「吉島家住宅」を見学させていただきました。日下部家は徳川幕府の御用商人として仕えた商家で、後に掛屋、両替屋を営んでいたそうです。主屋の吹き抜けは、太い梁と東柱が格子状に組み上げられています。高窓から注ぐ光が、焦げ茶色の木の輝きと深みのある陰影を際立たせるつくりは圧巻でした。梁は2階部分の荷重を支えるための梁と、もう一本梁があり二重梁になっていました。片

方の梁には、荷重を支えるような構造面での役割は担っていないと考えられ、井口さんもなぜ二重なのか詳しくはご存知ないようです。熟練の大工の方でもわからないようなことが日本の伝統的な住宅にはまだあるのかと思うと昔の人の考えには感銘を受けます。日下部邸に隣接する吉島家は代々酒造を家業とした豪商で、その証に軒下には大きな杉玉が吊り下げられています。吉島家住宅も、1階は一部大きな吹き抜け空間となっていました。日下部邸と比較すると、木の色合いが赤味がかかっていて、明るい印象を受けました。また何よりも特徴的であったのは2階のスキップフロアです。螺旋状に上がっていくフロアは天井、床の仕上げが少しずつ変えられ、それぞれ違った表情を見せてくれました。

その後、高山を散策し、まち並みを楽しませていただきました。小雨の降る中ではありましたが、雨が飛騨高山の趣深さを際立たせ、現代の名工井口さんの直接の解説もあり、高山の歴史や技術を学ぶ貴重な時間を過ごすことができました。関係者の皆さまに深く感謝いたします。

久田佳明 |  
名城大学建築学科4年



惣四郎のコンクリート仕切り壁



吉島家の湾曲した天井仕上げ



井口さんの貴重なお話

## 古き良き歴史を尋ねて —奈良・明日香村—

2017年11月11日(土)に毎年恒例の建築ウォッチングを開催いたしました。今年度は、奈良・明日香村に歴史ある寺院を中心に正会員6名、準会員1名、法人協力会員3名、一般の方11名、計21名の参加者で、バスにて訪問しました。途中天理市にて今年OPENした天理駅前広場「コフン」にも立ち寄り、近代的な建物についても少し見学するコースです。

## ●天理駅前広場「コフン」

最初の訪問地であるコフンです。天理駅に接続するように配置されている広場であり、市内に点在する古墳をモチーフにした建造物がいくつも重なり合うように築造されていました。商業施設や屋外ステージ、すり鉢状に木の板が張られていたり、中心が巨大なトランポリンになっているような子どもの遊具施設だったり、他にも円形状にテーブルとイスが配置されている憩いの空間などがあり、多くの世代が楽しく過ごせる広場となっていました。当日も多目的広場ではイベントが行われており老若男女問わずたくさんの人々が集まり活気に溢れた空間を感じられた。

## ●飛鳥寺

昼食後、明日香村へバスにて移動。次の訪問地は飛鳥寺です。日本最古である本尊飛鳥大仏は、609(推古天皇17)年につくられた仏像です。平安・鎌倉時代での大火災にて本堂などは焼失。最終的に、1826(文政9)年に再建され今日にいたります。本尊飛鳥大仏はつくられた当時から現在まで同じ位置に

安置されているとのこと。屋内にて飛鳥大仏の前に住職の話聞いていたときは時間を忘れて静かで心地良い空間を感じました。

## ●万葉文化館

次の訪問地へは飛鳥寺からは近いこともあり徒歩にて移動。奈良県立万葉文化館です。日本の古代文化である万葉に関する調査や研究・収集などを行う施設と一般公開されている各展示室や図書・情報室などを併せ持つ総合文化施設であり平成13(2001)年に開館。今回の訪問では、少し時間が短くすべての展示室をゆっくり見て回ることができず残念でしたが、日常にかかわることがない万葉の世界を少しは感じる事ができたように思います。

## ●石舞台古墳

その後、石舞台古墳へバスにて移動。多々ある古墳の中で今回は石舞台古墳を選択しました。古墳の中でも内部の石室が露出しておりメインとなる構造が見えていることが決め手でした。築造が7世紀の初め頃と推定されており古墳上部の封土は失われて現在のよう巨大な天井石が露出した姿になったとのこと。現在は、石室内部に入ることもでき外から見るよりも大きな空間が広がり、現在でも容易にはつくれないこの空間を古き歴史の中でつくられたことに感動を覚えました。

## ●岡寺

最後の訪問地である岡寺へ。当初徒歩にて現在の明日香村をゆっくり感じて移動する計画でしたが、少し行程に無理があったようで



石舞台古墳前での集合写真

時間が足りずバスにて移動することに。一般参加者の中には散策も楽しみにされていた方もおり残念がっておられました。現在呼ばれている「岡寺」という名は地名にちなんだ名で正式には「東光山真珠院龍蓋寺」といいます。境内には本堂以外にも三重宝塔や書院などいくつかの建築物もあり高低差のある敷地を階段でつないでいる形状でした。訪問時には、台風の影響で本堂など建物の裏山部分が崖崩れを起こしており、建物が被害を受けるギリギリの状態でした。山の緑に囲まれ秋には紅葉が綺麗な環境と自然災害は紙一重で共存していることを痛感しました。

毎年建築ウォッチングに参加者していただく一般の方々にはリピーター率が高いのですが、裏を返せば新規の方が少ないのが現状です。今後は、訪問先の選別はもとより広報面も考え実行していくことが必要ではと感じました。



相原宏康 (JIA 三重) | Hiro 設計室



駅前広場コフン



本尊飛鳥大仏



石舞台古墳の内部



岡寺 仁王門

## 2018年度東海支部役員選挙についての報告

2017年11月27日

東海支部選挙管理委員会委員長 谷村 茂

2018年度東海支部役員選挙について、11月24日に立候補を締め切り、11月27日に第2回選挙管理委員会を開催しました。立候補者は支部役員選出規約に定める定数と同数であり、推薦立候補届出書の記載も適正かつ被選挙人の資格を有することが確認されましたので、立候補者を当選人として確認しました。ここにご報告申し上げます。

当選人は下記の通りです。

### 【幹事】

#### ●静岡地域会

石橋 剛 (有)石橋修建築設計室

大瀧正也 (有)聖建築設計事務所 ○

#### ●愛知地域会

浅井裕雄 (有)裕建築計画

澤村喜久夫 (株)伊藤建築設計事務所 ○

西村和哉 (h+de-sign/architect)

森 哲哉 (森建築設計室)

吉元 学 (株)ワーク・キューブ ○

#### ●岐阜地域会

寺下 浩 (寺下浩一級建築士事務所)

山田浩史 (ヒロプランニング) ○

#### ●三重地域会

出口基樹 (日新設計株式会社)

豊田由紀美 (Y's建築設計事務所) ○

### 【監査】

大瀧繁巳 (株)金華建築事務所

服部 滋 (三共建築設計事務所) ○

注：敬称略、○印は再任

## 2018年度東海支部愛知地域会役員選挙についての報告

2017年11月27日

愛知地域会選挙管理委員会委員長 服部 滋

2018年度東海支部愛知地域会役員選挙について、11月24日に立候補を締め切り、11月27日に第2回選挙管理委員会を開催しました。立候補者は地域会長・副地域会長候補（支部幹事兼任）5名と、地域会監査2名の定数と同数であり、推薦立候補届出書の記載も適正かつ被選挙人の資格を有することが確認されましたので、立候補者を当選人として確認しました。ここにご報告申し上げます。

当選人は下記の通りです。

### 【地域会長・副地域会長候補】（支部幹事兼任）

浅井裕雄 (有)裕建築計画

澤村喜久夫 (株)伊藤建築設計事務所 ○

西村和哉 (h+de-sign/architect)

森 哲哉 (森建築設計室)

吉元 学 (株)ワーク・キューブ ○

### 【地域会監査】

谷村 茂 (アール・アンド・エス設計工房) ○

水野豊秋 (株)ヤスウラ設計

注：敬称略、○印は再任

# 東海支部役員会報告

昨年秋、本部（支部長）および支部役員の選挙が行われ、来年度の新役員が報告されました。各地域会では新体制における役員人事と来年度予算について検討が進められています。

現在幹事長とともに来年度予算の編成をしているところですが、会員数が減少する中で収入増を見込むことは困難な状況です。収入を増やす手立ても考えながら、経費を絞ることができるものは絞り、伝統のある事業を継続できるよう組み立てるつもりです。

『ARCHITECT』の先月号に掲載された支部会員アンケート調査結果によれば、財政が厳しい状況であることを前提にしたJIA活動と会費についての回答は、「会費の値上げもやむを得ない」20%に対し、「会費でできる範囲の活動をすればよい」が60%と多くを占めています。東海支部だけが支部会費を徴収していないということ、またここ数年進めてきた財政改革の結果も踏まえ、この先の支部財政について議論する必要があります。



澤村喜久夫 (JIA 愛知) | 伊藤建築設計事務所

日時：2017年12月15日（金） 16時00分～17時10分

場所：JIA 東海支部事務局 会議室

出席者：支部長、本部理事、幹事9名、監査1名、オブザーバー7名

## 1. 支部長挨拶

今年1年間ありがとうございました。来年5月の任期終了までに2年間を振り返り、組織の在り方について誌面に残し、次の方に引き継ぎたいと思います。東海支部設計競技、全国高専デザコン、中部建築賞の表彰式などに出席しました。

## 2. 報告事項

### (1) 本部報告

#### ①フェロウシップ委員会 (12/7) (谷村)

- ・フレッシュマンセミナー 2/24・25、金沢にて開催。宿泊先は「HATCHI」に決定。東海支部から及川氏（静岡）、上原氏（愛知）、内田氏（岐阜）が参加。支部より交通費を支給する。
- ・ウェルカムオフィスの受入について、東海支部では実績なし。

#### ②本部選挙管理委員会 (11/5) (服部)

- ・本部役員候補者選挙について、立候補者数が定数と同じで、全員選出された。選挙結果が11/15に告示された。

#### ③JIA告示15号特別委員会について (12/15) (小田)

- ・12/20、三合同会議を開き各団体の事前のアンケート結果内容について話し合い、その要望をまとめて国交省に申し入れる。来年早々に国交省アンケート調査が始まる。

### (2) 支部報告

#### ① 東海支部選挙管理委員会 (11/27) (谷村)

- ・立候補者数が定数と同数、推薦人含め届出書は問題なく、立候補者の当選を確認した。推薦立候補届出書に日付の記載がない書類が多数あった。また届出書に生年月日、入会年月日を記載するとよい。
- ・監査は地域会単位の選出ではなく、支部の選出。

#### ② 第34回東海支部設計競技二次審査会+講演会 (12/2) (寺下)

- ・応募総数32作品（一般17、学生15）。二次審査対象は7作品で、金賞1作品、銀賞2作品、銅賞4作品が選ばれた。奨励賞は3作品がすでに選

ばれており同日講評があった。その後大西麻貴氏の記念講演会が行われた。

#### ③ 東海支部登録建築家認定評議会 (矢田・藤巻)

- ・3月末に本部認定評議会開催、それに先立ち2/17支部認定評議会を開催する。
- ・1/31更新手続き締切のため、各支部委員から更新の催促をお願いします。

### (3) その他

#### ① 退会届「増澤信一郎（静岡）」(大瀧)

- ・慰留するも退職のため退会（12/20付）される。

#### ② 三重県玉城町被害認定調査について (奥野)

- ・台風21号により罹災した家屋の被害認定調査（二次）業務を受託した。
- ・契約手続きはJIA本部から三重地域会が委任を受け、玉城町と三重地域会で契約した。
- ・12/6～8に認定不服申し立てのあった3件を調査した。

## 議 事

### 1. 審議事項

#### ① 事業報告「第34回JIA 東海支部設計競技」(寺下)

- ・収入770,000円、支出787,384円、収支差額▲17,384円 →承認

#### ② 後援名義使用許可依頼

- ・世界劇場会議名古屋「世界劇場国際フォーラム2018（2/8・9）」(矢田) →承認

### 2. 協議事項

#### ① 2018年度 東海支部事業計画・予算案について (矢田)

- ・現予算案は赤字予算になっている。内容を精査し、赤字にならない予算で提示する。予算案として目を通していただき、質疑・指摘事項があれば申し出てください。
- ・事業積み立てから取り崩しも入れ、多少余裕を持った予算とし、運用において締めていく。
- ・今年中に各地域会の来年度予算を取りまとめてください。2/10までにまとめて本部へ報告する。
- ・アーキテクト広告収入などが減る中で支部の財政について、総務にて継続して検討する。

### 3. その他

#### ① 講演会「地方公共団体におけるコンペのあり方を考える ～岐南町庁舎の場合～」(藤巻)

- ・3/3、15:00からTOTOプレゼンテーションルームにて開催。（講師：室伏次郎氏、小森雄一郎氏）
- ・公共建築の発注システムをどう考えるかをテーマとしたシンポジウム。
- ・各行政に郵送にて案内を配付する。
- ・岐阜、三重、静岡の建築士会にも後援を依頼する。支部から各建築士会に後援依頼書を出す。

#### ② アーキテクト3月号法人協会会員広告 (岐阜・三重) (矢田)

- ・穴があかないようご協力をお願いします。25,000円/1社

### 4. 監査意見

- ・北陸支部も支部会費を徴収することになったそうで、東海支部だけが徴収していない。全国の支部が支部会費を徴収するのであれば、それを止めて本部の会費を上げるよう申し入れをしてはどうか。（服部）



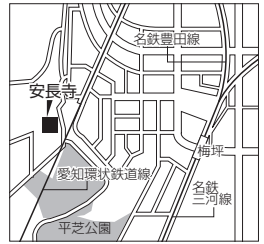
山門全景



山門上層組物



本堂から山門



■紹介者コメント

安長寺は、豊田市の高台となっている梅坪町に所在する真宗大谷派の寺院である。隣接する平芝公園の向こうには矢作川と豊田市北東部が見える高台の地であり、本堂から山門を通して見る豊田市の市街地は絶景である。ただ、寺へのアプローチは住民以外にはわかりづらく、結構迷ってしまった。私が訪ねたときには、幼稚園児の団が12月の寒さにも負けず平芝公園から安長寺までの散歩をしていた。

安長寺の住職にお伺いしたところ、もともと加賀国大杉谷の城主・杉浦安長が室町時代の文明9(1477)年に現在より北に位置する2つの川がぶつかる豊田市荒井町の辺りに寺を建てたのが始

まりという。しかし、度重なる洪水で、現在より東の地に移転し、その後再移転し、現在の場所に天保3(1832)年に再建された。なお、本堂と鐘楼堂は建て替えられているが、山門とバックの小山の緑とで全体の配置は山寺を思わせる雰囲気醸し出している。

山門は、本堂の前に、東を正面にして建ち、屋根は入母屋造の瓦葺きであり、間口3.9奥行2.9mある。上層部には仏壇を設け、住職が子どものころは毎日梯子段を上り、上部回廊を歩いて表からお供えをしていたという。現在その階段はなく、開口部がその面影を残している。安置されている三尊仏は、納骨堂に安置されている。山門を建てた大工は豊田市力石近傍の如意寺(登録文

化財)にも従事した山本金四郎貞次とのことで、組物彫刻は素晴らしく一見の価値がある。

初代梵鐘は戦時中に供出され、山門横に置いてある2代目梵鐘は最近まで使われていたが、戦後の物不足のときにつくられたためか材質が良くなく、現在は3代目の鐘楼が設置されている。

所有者：宗教法人安長寺  
所在地：愛知県豊田市梅坪5丁目14-1  
建設年：天保3(1832)年  
規模・構造：木造瓦葺き、間口3.9m  
文化財指定等：登録有形文化財 23-505  
(2017年7月21日答申)

谷村 茂 (JIA 愛知) | R&S 設計工房



データ発掘 (お気に入りの歴史的環境調査)

名古屋市守山区翠松園「翠松園の邸宅」



「Y邸」の入り口の門



左手奥は母屋、右手が離れ家



母屋と離れ家との渡り廊下



前庭のRC造の月見席



■紹介者コメント

名古屋市の北東、守山区に翠松園という丘陵地がある。名鉄瀬戸線の駅を降りて、尾張徳川家縁の大森寺脇を北に昇ると金城学院大学があり、周辺は閑静な住宅街となっている。翠松園はもと名古屋の別荘地として開発されたもので、当所に建てられた住宅は比較的大きなものが多く、この「Y邸」も類に漏れない。

700坪余の広い敷地は南側と北側に接道があり、道路から敷地中心に向かって小高い丘となっている。東から西へ向かって母屋と離れの2棟があり、建坪は約100坪。母屋は大正末期の建築で、木造平家、入母屋造り。離れは戦後の増築で、渡り廊下で母屋と接続されている。

離れの1階は木造柱のピロティー形式になっており、畳敷きで設えられた縁台は夕涼みや芸姑さんたちを招いての宴の時に利用されていたらしい。先々代の所有者がこの建物を建てた当時は左官屋の頭領だったようで、離れのいたる所に凝った仕事が見受けられる。座敷を囲う縁側の天井は丸太の棹に左官仕上の塗材が施されていて、壁の左官仕上と相まった趣のある意匠となっている。縁側の建具は硝子戸の掃き出しで、開け放たれたときには畳床を這うように風が通り抜ける。離れと母屋を接続する渡り廊下は腰窓と腰窓下の風通しが設けてあり、夏の暑さ対策にも気を配ってつくられたのであろう。離れの東端にはサンルームも設けられており、座敷の奥には隠し部屋らしき

ものも存在するという、なんとも趣味に富んだつくりである。

母屋は昭和に入ってから改築されており、南に広がる前庭にあるRC造の月見席はその改築時に増築されたものらしい。居間部分もモダンなスキップフロアに改築されている。この建物、いろいろと諸事情があるようだが、何とかこの状態を保持しつつ残していって欲しいものである。

所在地：愛知県名古屋市守山区翠松園  
建設年月日：主屋(大正末期/後に改築)、離れ(昭和戦後/後に増築)  
規模：敷地面積 約700坪、延べ面積 約100坪

原眞佐実 (JIA 愛知) | 原建築設計事務所



## 会報誌『ARCHITECT』の行方

本誌2018年1月号東海支部設立30周年記念号で、会報誌『ARCHITECT』の今後の在り方に関する会員アンケート調査結果が報告されました。回収率(33%)には不満が残りますが、その結果は、「毎月発行で続けるべき」が28.1%、「月刊でなくてもよい(隔月・季刊など)」が52.6%、「紙媒体を廃刊してすべてWEB配信でよい」が16.7%、「わからない・無回答」が2.6%という数字に、あらためてこれまで以上に、月刊で紙媒体・活字という方法に託したい思いを強くしました。

思い起こせば、私のJIAの活動は、会報誌『ARCHITECT』の一編集者としてのかわりに始まります。入会は1987年の(社)新日本建築家協会の発足時にさかのぼりますが、発足して3年目、1990年の春、当時の愛知部会プリテン委員長(同誌の編集責任者)であった森鉦一さんから声をかけられ、次期の同委員長就任の要請を受けたのです。

同誌発行の経緯を調べますと、創刊号は、1988年10月1日に発行されています。その奥付によれば、「ARCHITECT 創刊号(第1号)発行日1988・10・1(毎月1回発行)定価380円発行所 社団法人新日本建築家協会東海・北陸支部 発行責任者 栢本良三 編集責任者 森 鉦一 編集 愛知部会プリテン委員会 建築ジャーナル 名古屋市中区栄四丁目3番26号 TEL (052) 263-4636 FAX 251-8495」と表示されています。翌月の第2号は発行所が変わり「社団法人新日本建築家協会東海・北陸支部愛知部会」と表示されています。創刊号は支部の会報誌として、第2号以降は愛知部会の会報誌として発行されていました。今となってはその理由を追求しても致し方ないことですが、恐らくそれ以後に本誌の存続が議論されたときと同じ議論があったと推測されます。

私の編集責任者として最初の仕事は1990年6月号(第21号)の発行でした。その年の秋、当時の東海支部PR委員会では、当年度目標として同誌の支部会報誌化の検討を始めたことが1990年11月号(第26号)の編集後記に記載されています。通常の編集作業以外に支部会報誌化の対応を余儀なくされ、ほぼ1年半の審議の後、1992年4月号(第43号)でようやく支部の会報誌に戻りました。その間の議論は、一つは支部の財政上の問題と、夫々の部会(現在の地域会)が独自のものを発行したいという意向と、さらには編集の主体と責任の問題に絞られたように記憶しています。このことは今でも本誌の宿命のようです。

最近号は、財政上の理由からでしょう、16ページに圧縮されていささか心もとない感がいたしますが、それでも毎年支部では同誌の継続が審議された上で存続が図られているようです。同誌の奥付は創刊以来最近号まで記載事項は一部順序が変わっただけで書式、書体とも一切変更なく、毎月1日発行と編集の独立を堅持し30年近く経過しています。創刊号の編集後記によれば、同誌創刊の意図は、「外に対しては建築家職能の理解を求め、内には建築家倫理の徹底を図り、建築家職能の確立を目指す大目的のために建築家の団結を図るコミュニケーションの場にしたい」とあり、このまま現在にも通用させねばなりません。頑なに守られてきた毎月一回の発行が、東海支部会員にとって、機関誌を月一回手にすること(実際は定価380円で購読されていることになっている)で、JIAとのつながりを確認されてきたことは、創刊以来変わっていません。どんなメディアにも変えようがないと思われませんがいかがでしょうか。



森口雅文 (JIA 愛知) | 伊藤建築設計事務所

## 地域会だより

### <静岡>

- 12/1 建築サロン開催予定
- 12/13 12月静岡地域会拡大役員会・忘年会
- 2/9 建築ウォッチング  
(掛川市森林組合事務所見学会+山部豊彦氏講演会)

### <愛知>

- 9/29～1/26 2017年度 名古屋市立大学講義
- 12/8 JIA愛知役員会
- 12/13 JIA愛知賛助会役員会
- 1/5 新年互例会

- 1/17 JIA愛知賛助会役員会

- 1/19 JIA愛知役員会・新年会

### <岐阜>

- 12/8 岐阜地域会役員会+忘年会(18:00～) 場所:おく田
- 1/17 岐阜地域会役員会

### <三重>

- 12/1 会員研修4、第7回役員会、第6回例会
- 1/20 建築文化講演会 前田圭介氏「郷土の根となる建築とは」
- 2/9 会員研修5

# 弔りこころ、大切な葬儀

## 葬儀のこと、お応えします。

一柳の葬儀は、各種・価格を段階的に用意いたし、ご希望される予算に合わせてお見積りいたします。宗教・宗派、葬儀規模の大小にかかわらず、全ての葬儀に丁寧にお応えしています。

いちやなぎ斎場は、365日・24時間、いつでも病院・施設等から直接入れます。

### いちやなぎ中央斎場

名古屋市千種区千種二丁目19番1号  
TEL (052)745-1212

### いちやなぎ野並斎場

名古屋市天白区野並三丁目538番1号  
TEL (052)899-0111

◆葬儀のお申し込み◆お問い合わせ◆事前相談は

TEL.052-251-9296

365日・24時間 一柳のスタッフが対応いたします!

日本建築家協会東海支部 特約店



一柳葬具總本店

<http://www.ichinagi-sougu.co.jp>

### イチヤナギ倶楽部

- 入会金1万円のみで掛金不要、基本価格の2割引と交通事故傷害保険の特典取得
- 相続、遺言、後見制度など相談先の紹介が受けられます



## 編集後記

●阪神・淡路大震災から23年、東日本大震災から7年がたちます。毎年この時期になると、震災に関連した番組が多数放送されます。その中で震災の記憶の風化が問題にされることがありますが、ここ日本において震災は過ぎ去った過去ではありません。今でも大きな地震が定期的に起きています。昨年12月19日に政府の地震調査委員会から、北海道東部の十勝沖から択捉島沖の千島海溝で、マグニチュード(M)9級の超巨大地震が今後30年以内に7~40%の確率で起きるとの予測が公表されました。南海トラフ巨大地震についてもM8~9級が30年以内に60~70%の確率で起きると予測されています。活断層の状況を考えると、日本に地震災害と無関係な地域はありません。災害は過去の話ではなく明日起こるかもしれない直近の未来です。1.17、3.11を追悼として振り返るだけでなく、今そ

こにある危機として、災害に備えることを継続していく。それこそが私たちが心掛けておくべきことなのではないでしょうか。(石田博英)

●昨年7月のある日メキシコ大使館から一冊の図書とともに書簡が届いた。ハードカバーB5版600ページ余の本は一瞥しただけでただならぬ気配を感じたことを思い出す。題名は「マヤ神話ポボル・ヴフ」古代マヤ文明の口誦文学がキチュー語のテキストに再構成され、それをスペイン語に、そしてこの度、再度日本語に移されたもの。カミーノ女史の言葉によれば「テキストに落としたマヤの作者たちは、スペイン人による精神的かつ物質的な侵略の前に、祖先の遺産を自身の言葉でもって保持する義務を自らに課したのである」と。紀元前数千年の時代から、のちのスペイン人の上陸、キリスト教宣教師の活動の中でも、その宗教的、歴史的遺産を保存し固有の文明を守ろうとするその力の強さ。私たち建築家の日々の活動も、現在を生き真摯に自身と向き合いつつ建築に立ち向かっている人たちによっ

て、大きなうねりの中では全く目立たないけれど、きっと戦後70数年、JIA設立30年の経過の中で確実に小さなたまごを生み続けているのではと感じている。(黒川喜彦彦)

### ARCHITECT

第353号

発行日 2018.2.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込み)

発行責任者 車戸慎夫

編集責任者 中澤賢一

編集 東海支部会報委員会  
愛知地域会ブリテン委員会  
建築ジャーナル内  
ARCHITECT 編集部

名古屋市東区泉 1-1-31 吉泉ビル 703

TEL (052)971-7479 FAX 951-3130

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部

名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail : shibu@jia-tokai.org

<http://www.jia-tokai.org/>